松山市文化財調査報告書79

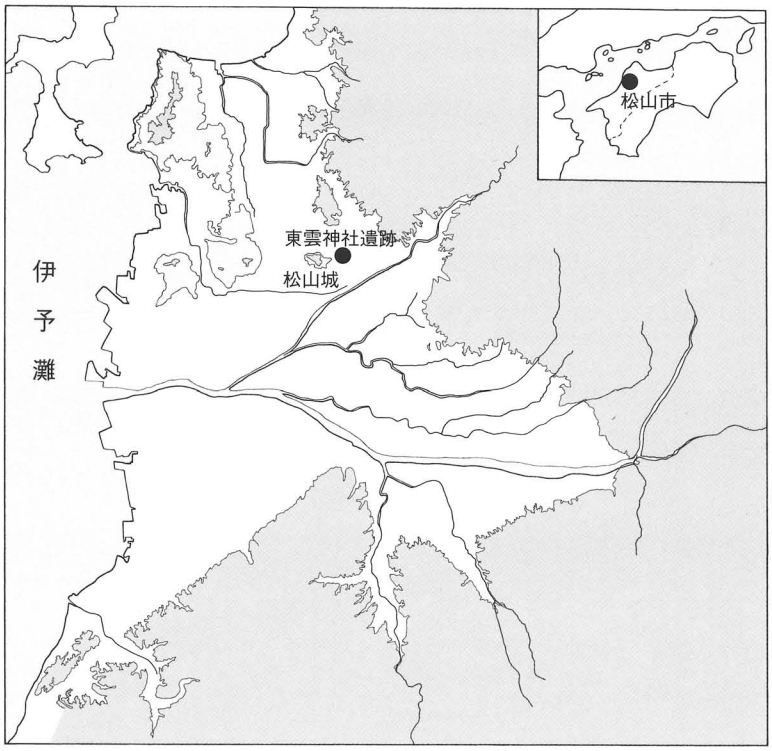
東雲神社遺跡

2001

松山市教育委員会
財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

しののめじんじゃ

東雲神社遺跡



2001

松山市教育委員会
財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地遠景（東より）

巻頭図版２　出土遺物

序

本書は、昭和47年度と昭和48年度とに松山城東山麓にある東雲神社境内で実施しました埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

松山城から道後温泉にいたる地域は、道後城北遺跡群と称され、弥生時代の松山平野の中核集落、さらには西部瀬戸内地方の主要集落であったことが、近年の調査で明らかになってきました。東雲神社は、その中心になる文京遺跡を眼下にする丘陵上にあります。

今回の調査では、弥生時代の祭祀土坑、古墳２基と多くの副葬品を検出し、道後城北遺跡群でも出土が少ない縄文土器も得られています。このうち、弥生時代中期の祭祀土坑からは、完形の土器が７個体出土し、祭祀研究や土器編年研究の第一級資料になっています。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成１３年２月２８日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　　中　村　時　広

例　言

1．本書は、松山市教育委員会が昭和47年度、昭和48年度に松山市丸ノ内町東雲神社境内で調査した埋蔵文化財の調査報告書である。

2．遺物の実測・製図等は、梅木謙一の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝が行なう。このうち、埴輪の実測では山内英樹氏（(財）愛媛県埋蔵文化財調査センター）の協力を得た。

3．挿図の縮尺は、縮尺値をスケール下に記した。遺物図は、弥生土器が１／４、須恵器・埴輪は１／３を原則とした。

4．測量図等の方位は、磁北である。

5．写真は、大西朋子が担当した。

6．本書にかかわる資料は、松山市埋蔵文化財センターで収納・保管している。

7．本書の執筆は、森光晴氏（調査時の担当者）、西尾幸則氏（当時、主事）の助言をうけ、梅木謙一が行なった。付章１は山内英樹氏（(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター）に協力をえた。また、報告書作成時の現地調査では、東雲神社宮司 田内逸武氏にご協力を賜った。

8．編集は、梅木謙一が行ない、水口あをいの協力をえた。

9．報告書作成データーは下記である。
製版：カラー写真・白黒写真図版－175線
印刷：オフセット印刷
用紙：カラー写真図版・本文・白黒写真図版
　　マットカラー135kg
製本：アジロ製綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに
１．報告に際して……1
２．刊行組織
３．環　境……3

第２章　調査と出土資料
１．Ａ地点の調査……6
２．Ｂ地点の調査……10
３．Ｃ地点の調査……13
４．Ｄ地点の調査……15
５．Ｅ地点の調査……17
６．Ｆ地点の調査……18
７．Ｇ地点の調査

第３章　調査の成果と課題……19

付章１　東雲神社遺跡出土品　……21

挿　図　目　次

第１図　調査地点位置図（縮尺１／1,000）……2
第２図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺１／25,000）……5
第３図　Ａ地点出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……7
第４図　Ａ地点出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……8
第５図　Ａ地点出土遺物実測図（３）（縮尺１／４）……9
第６図　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……11
第７図　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……12
第８図　Ｃ地点１号横穴式石室出土遺物実測図（１）（縮尺１／２）……14
第９図　Ｃ地点１号横穴式石室出土遺物実測図（２）（縮尺１／２）……15
第10図　Ｄ地点出土遺物実測図（縮尺１／３）……16
第11図　Ｅ地点ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１／４）……17
第12図　平成12年採集遺物実測図（縮尺１／４）……18
第13図　Ｇ地点の現況（北西より）……20
第14図　東雲神社遺跡出土の遺物実測図（１）（縮尺１／３）……22
第15図　東雲神社遺跡出土の遺物実測図（２）（縮尺１／３）……23
第16図　断続ナデ技法模式図……24

写真図版目次

巻頭図版１．調査地遠景（東より）
　　２．出土遺物
図版１．１　調査地遠景（松山平野：南東より）
図版２．１　東雲神社（東より）
　　２　Ａ地点の現況（南東より）
図版３．１　Ｂ地点ＳＫ１の現況（東北より）
　　２　Ｃ・Ｄ・Ｅ地点の現況（北東より）
図版４．１　Ｆ地点の現況（北より）
　　２　Ｇ地点の現況（北西より）
図版５．１　Ａ地点出土遺物
図版６．１　Ｃ地点１号横穴式石室出土遺物（１）
図版７．１　Ｃ地点１号横穴式石室出土遺物（２）（Ｘ線写真）
図版８．１　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物（１）
図版９．１　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物（２）
図版10．１　Ｄ・Ｅ地点出土遺物
図版11．１　東雲神社遺跡出土の遺物（１）
図版12．１　東雲神社遺跡出土の遺物（２）

第1章　はじめに

1．報告に際して

東雲神社遺跡は、古くから知られており、西園寺源透編『伊予考古資料』（伊予史談会蔵）で古墳の存在が紹介されている。その後は、地元の研究者により古墳を中心に踏査による分布調査が進められてきた。

松山市教育委員会が、調査を開始したのは昭和47年からである。この年の９月、神社の改築中に土器が発見され、採取調査の結果、弥生土器が多数得られた。これ以後、神社の改築等に際しては、埋蔵文化財の調査が実施されるようになった。

調査は、昭和47年～昭和48年に実施され、７箇所で遺構や遺物を確認した（第１図）。このなかには、古墳６基（未調査含む）や弥生時代の土坑２基があり、弥生時代中期土器の一括資料が含まれる。

これらの調査と資料は、一部が紹介されているが、今回の本格的な整理により訂正されなければならない事項も生じている。訂正内容は、個々の報告で記していく。

本格的な整理は、平成11年と平成12年に、当時の調査担当者の指導と助言をうけて、実施した。

本書では、調査地点ごとに報告をおこなっていく。

さて、本遺跡の名称には、四つの遺跡名があり、「東雲神社遺跡」「東雲遺跡」「勝山遺跡」「東雲神社長者平遺跡」がある（註１）。

本報告では、松山市の本格調査一覧や使用が最も多い「東雲神社遺跡」を用いる。

2．刊行組織（平成１３年２月２８日現在）

松山市教育委員会

	教育長	中矢　陽三
事　務　局	局　長	團上　和敬
	局長付参事	森脇　　將
	次　長	赤星　忠男
文化教育課	課　長	馬場　　洋

財団法人松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	江戸　　孝
	事務局次長	森　　和朋
埋蔵文化財センター	所　長	中川　　隆
	専門監	野本　　力
	調査係長	田城　武志
	調査主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	調査員	梅木　謙一
		大西　朋子

註１：遺跡名使用例（主な文献）

東雲神社遺跡：『全国遺跡地図　愛媛県』文化庁　1974

『愛媛県史　原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん委員会　1982

『古代の松山平野』松山市教育委員会　1982

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会　1987

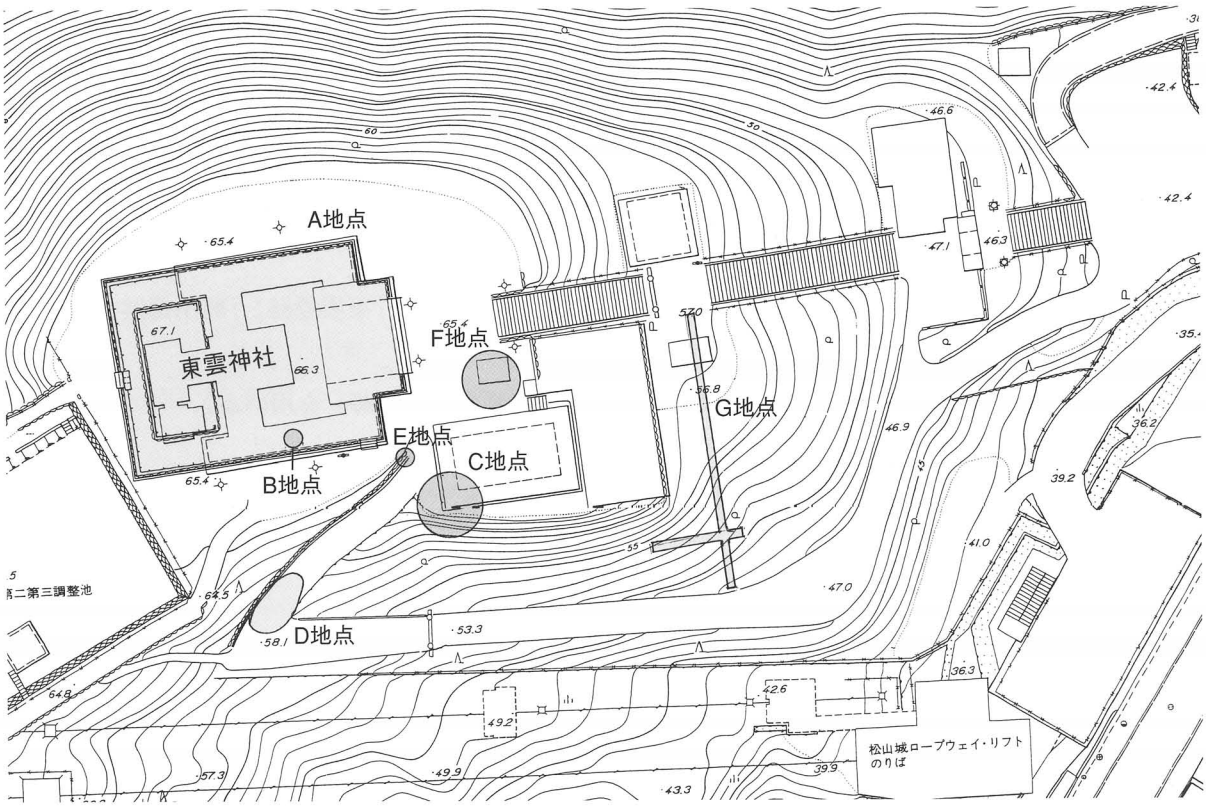
東雲遺跡　：『ふたな　創刊号』ふたな　1977

『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編さん委員会　1986

『松山市史資料 第二巻　考古２』松山市史料集編集委員会　1987

勝山遺跡　：『松山市史資料 第一巻　考古』松山市史料集編集委員会　1980

東雲神社長者平遺跡：『文京遺跡』松山市教育委員会　1976



第１図　調査地点位置図（Ｓ＝１：1,000)

表1　調査地点一覧

地点名	調査年月日	場　　所	遺　　構	遺　　物
A	昭和47年９月23日	本殿一帯		縄文･弥生･土師器･埴輪
B	昭和47年10月	本殿南東部	土坑1墓	弥生（完形品）
C	昭和47年10月20日	宝物殿西側	横穴式石室･箱式石棺	鉄製品･玉類･弥生･須恵器
D	昭和47年10月	境内道路西端部（採集地）		須恵器
E	昭和47年10月	本殿と宝物殿の間	土坑1墓	弥生（完形品）
F	昭和47年10月	宝物殿北側正面	埴輪列	
G	昭和48年	宝物殿東側		

3．環　境

（1）立　地

松山平野は、高縄半島の南西部にあり、高縄半島と四国山地に源を発した大小の河川により形成された沖積平野である。平野北部には独立丘陵があり、この丘陵を利用したのが松山城（勝山もしくは城山）になる。東雲神社は、松山城である勝山の東側丘陵上に立地する。

縄文後期以前には、石手川が勝山の北を流れていたことが知られ、弥生時代以降にも勝山の南北には、小河川が幾筋か流れていたようである。

（2）歴史的環境（第2図）

東雲神社を含む松山城北部域は、道後城北地区と称され、文京遺跡や道後湯築城をはじめとし、松山平野の主要な遺跡が展開している。

旧先土器時代

祝谷丸山遺跡採集資料があげられ、細石核や細石刃が出土している。同資料については、多田　仁氏（多田　仁 1992）により詳細な検討がなされている。

縄文時代

縄文時代中期の土器片が1点、東中学校構内（文京遺跡4次調査）から出土している。この資料が道後城北地区で最も古い縄文土器資料となる。後期は、文京遺跡11次調査（宮本一夫 1990）や道後樋又遺跡（南海放送遺跡　西尾幸則 1989）、岩崎遺跡（宮内慎一1999）で土器や焼土が検出され、この地域が居住域としてあったことが知れる。晩期は、道後今市遺跡10次調査地（多田・湖西ほか 1994）で土坑と供に土器も出土し、集落の一端がうかがえる。この時期に、遺跡数が増加する。

弥生時代

前期：松山東中学校構内（文京遺跡、栗田茂敏 1992）からは、前半の円形竪穴式住居址2棟が検出されている。平野で最も古い弥生時代の竪穴式住居址で、いわゆる松菊里型の住居址になる。後半は、持田町三丁目遺跡（真鍋昭文1995）で墓が多数検出され、なかには磨製石剣や石鏃、管玉を副葬する墓もある。前期末～中期初頭には、環壕集落を形成する岩崎遺跡（宮内慎一 1999）がある。

中期：前半には北側山麓の祝谷六丁場遺跡（宮崎泰好 1991）で、多量の土器と石器が出土している。土製品には分銅形土製品を20点余り、石器には石戈1点を含んでおり、松山平野の重要遺跡といえる。後半は、愛媛大学構内を中心に展開する文京遺跡（愛媛大学埋蔵文化財調査室 1998）がある 。文京遺跡は、これまでに10数次の調査がなされ、後期前半まで松山平野の中心的遺跡となる。遺跡には大型円形住居址、大型掘立柱建物址、周溝状遺構、遺物には青銅鏡、鉄器、ガラス滓などがある。

後期：松山大学構内で遺跡が展開する時期で、竪穴式住居址や朱に関する石器（石杵）などが出土している（梅木 1991、宮内 1995）。終末期には、勝山（城山）の西麓に墳丘墓や周溝墓が造営される（若草町遺跡：相原 1994、土井 1996）。若草町遺跡では、直径20数mの円形周溝が検出され、溝からは多量の土器が出土し、山陰や近畿等の県外資料が含まれている。

古墳時代

5世紀代は松山大学構内、6世紀代は愛媛大学構内に集落が主に展開する。古墳は、北及び東の山

麓と勝山に造営され、7世紀代までの古墳が確認されている。このうち7世紀の瀬戸風峠4号墳（相原浩二 1997）からは横穴式石室内の奥壁に近い場所から、炭が多量に発見された。炭の上からは人骨が出土したが、人骨は火をうけた様子はなく、炭を敷いた後に埋葬されたことが明らかになっている。

古　代

道後に白鳳期の湯ノ町廃寺と内代廃寺（吉本　拡 1986）がある。岩崎遺跡では、南北にはしる溝と土師器、さらには土馬が出土している。

中　世

道後温泉に隣接する愛媛県立道後公園には、14世紀築造の湯築城跡がある。調査の結果、中世から近世への移行期の城郭研究にとっては一級の資料であることが確認されている。

以上、東雲神社を含む道後城北地区の遺跡について簡単に触れた。この地域には、各時代において平野でも主要な遺跡が展開しているのである。

【文　献】

多田　仁　1992　「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮本一夫　1990　『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室

西尾幸則　1989　「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

多田　仁・湖西一成・林　奈美　1994　『道後今市遺跡Ⅹ』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1992　『文京遺跡－第2・3・5次調査－』愛媛大学・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

真鍋昭文　1995　『持田町3丁目遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

宮内慎一　1999　『岩崎遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮崎泰好　1991　『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

愛媛大学埋蔵文化財調査室　1998　『文京遺跡シンポジウム・資料集』

梅木謙一　1991　『松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

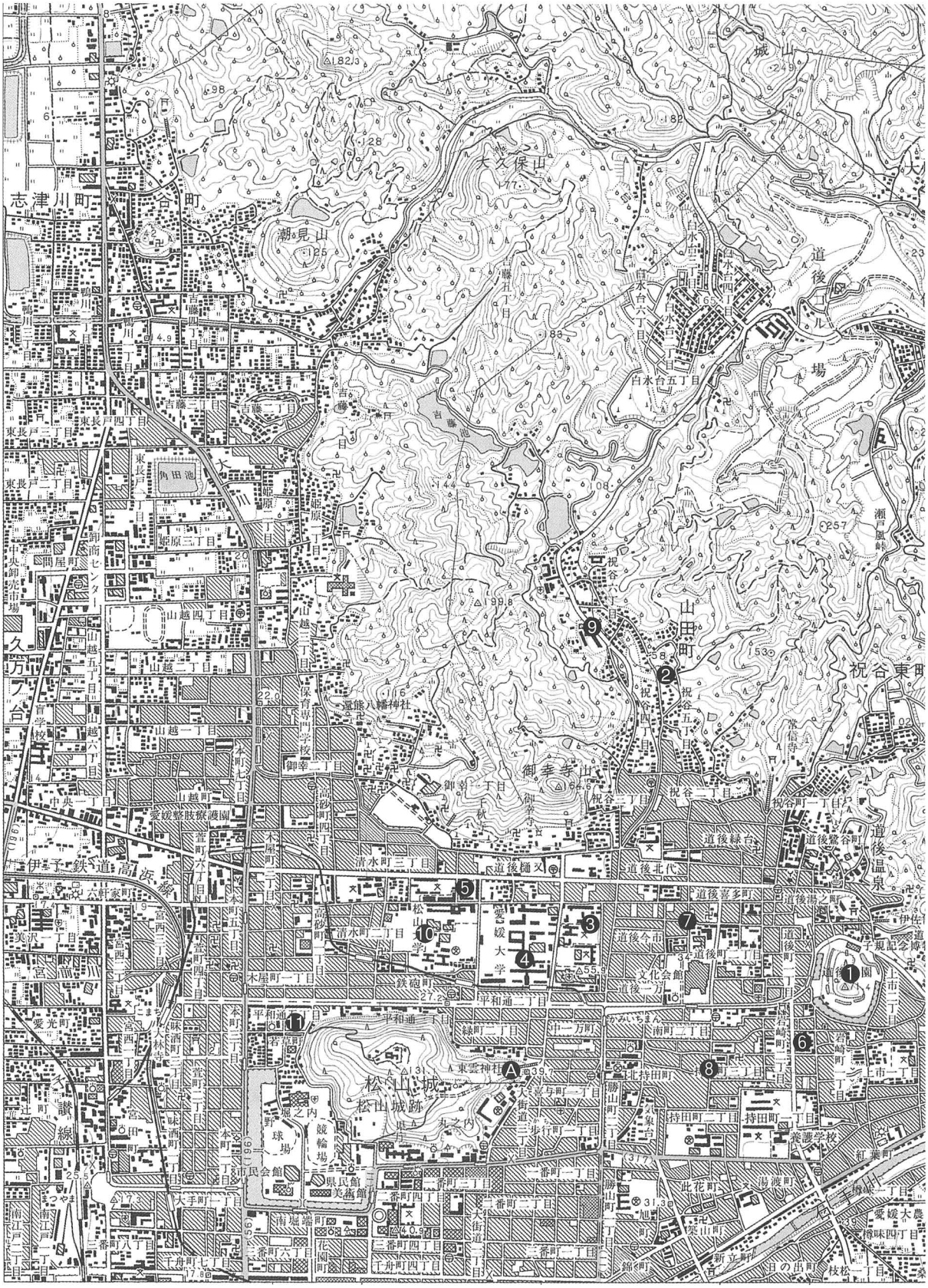
宮内慎一　1995　『松山大学構内遺跡Ⅱ－第3次調査－』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原浩二　1994　「若草町遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

土井光一郎・伊藤祐三　1996　『若草町遺跡Ⅱ』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

相原浩二　1997　「瀬戸風峠古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

吉本　拡　1986　「湯ノ町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会


城山
大久保山
志津川町
潮見山
道後ゴルフ場
白水台
吉藤
吉藤池
角田池
姫原
山越
熊八幡神社
御幸寺山
山田町
祝谷東町
祝谷
常信寺
瀬戸風峠
道後温泉
道後鷺谷
道後台
道後北代
道後喜多町
道後湯之町
道後今市
文化会館
清水町
道後樋又
愛媛大学
松山大学
鉄砲町
平和通
緑町
南町
岩崎町
北持田町
持田町
養護学校
東雲神社
松山城
松山城跡
丸之内
内堀
球場
嬢輪場
県民会館
美術館
大手町
南堀端町
花園町
千舟町
二番町
一番町
大街道
歩行町
勝山町
此花町
湯渡町
新立町
枝松
愛媛大農
樽味四丁目
伊予鉄道高浜線
久万台
中央卸売市場
愛媛整肢療護園
愛光町
木屋町
高砂町
味酒町
宮西
宮田町
南江戸
つやま
上市
子規記念博
伊佐爾波
鴨川
東長戸
御幸
保育専門学校
中央
山越
本町七丁目
本町五丁目
本町二丁目
本町一丁目
宮町
大川
祝谷六丁目
祝谷五丁目
祝谷四丁目
祝谷三丁目
祝谷二丁目
祝谷一丁目
祝谷町一丁目
白水台六丁目
白水台五丁目
白水台四丁目
白水台三丁目
白水台一丁目
吉藤五丁目
吉藤一丁目
東長戸四丁目
東長戸二丁目
姫原三丁目
姫原一丁目
山越四丁目
山越五丁目
山越二丁目
山越一丁目
山越六丁目
中央一丁目
御幸一丁目
御幸二丁目
清水町三丁目
清水町二丁目
木屋町一丁目
平和通二丁目
平和通一丁目
若草町
緑町二丁目
南町二丁目
北持田町
持田町二丁目
持田町一丁目
勝山町二丁目
勝山町一丁目
一番町一丁目
一番町二丁目
一番町三丁目
一番町四丁目
二番町四丁目
二番町二丁目
二番町一丁目
大手町一丁目
南堀端町
千舟町七丁目
千舟町四丁目
三番町八丁目
三番町六丁目
三番町四丁目
三番町一丁目
錦町
新立町
枝松一丁目
日の出町
樽味四丁目
愛媛大農
湯渡町
此花町
紅葉町
高砂町四丁目
高砂町一丁目
宮西一丁目
宮西二丁目
宮田町
味酒町一丁目
味酒町二丁目
味酒町三丁目
愛光町
宮町四丁目
宮町二丁目
宮町一丁目
木屋町二丁目
木屋町一丁目
本町七丁目
本町五丁目
本町二丁目
本町一丁目
山越一丁目
山越六丁目
中央一丁目
御幸一丁目
清水町三丁目
清水町二丁目
道後樋又
道後北代
道後喜多町
道後湯之町
道後今市
道後一丁目
道後二丁目
文化会館
鉄砲町
平和通二丁目
平和通一丁目
緑町二丁目
南町二丁目
岩崎町

第２章　調査と出土資料

１．Ａ地点の調査

昭和47年９月下旬、神社内の改築中（第１図、図版２）に、掘削土から土器が出土しているとの話があり、これを受け、教育委員会の文化財担当者は現地にむかい、掘削土から弥生土器約150点を一日で採取した。

出土遺物は、弥生土器が多数を占め、縄文土器・埴輪・古墳時代土師器・古代土師器の破片が各１点ある。

出土遺物（第３～５図・図版５）

１～47は、弥生土器で、中期後葉～後期前葉に比定されるものである。

甕形土器（１～16）　１～９は中型品である。１～４は胴部の張りが弱く、５～９は胴部の張りが強く、口縁端部はナデ凹みや沈線をもつ。10は大型品で、頸部には突帯、口縁端部には沈線をもつ。11～13は中型品の底部片で、わずかにくびれ、上げ底になる。14～16は「く」字状の口縁部をもち、口縁端部はやや広い面をもつ。

壺形土器（17～31）　17は短い口縁部が緩やかに開き、18は口縁部が外傾し大きく開く。19は細頸で、直口口縁をもつ。20～24は口縁端部が拡張され、２～４条の凹線をもつ。25～27は頸部で、突帯や沈線をもつ。28は頸胴部片で、「鹿」の線刻がある。29は長頸壺で、中国地方に類例が求められる。30・31は底部で、広い平底になる。

鉢形土器（32～35）　32は大型品で、口縁部が直立し、口縁端部は面をなす。33～35は中小型品で、口縁部は外反する。

高坏形土器（36～42）　36～38は坏部で、口縁部が36は鋤先状を呈し、37は内湾、38は外反する。38の口縁端部と口縁外面とには沈線をもつ。39～42は脚部で、凹線と矢羽根文をもつ。

器台形土器（43～46）　43は受部、44・45は柱部、46は裾部になる。44は円孔、46の脚端部には沈線をもつ。

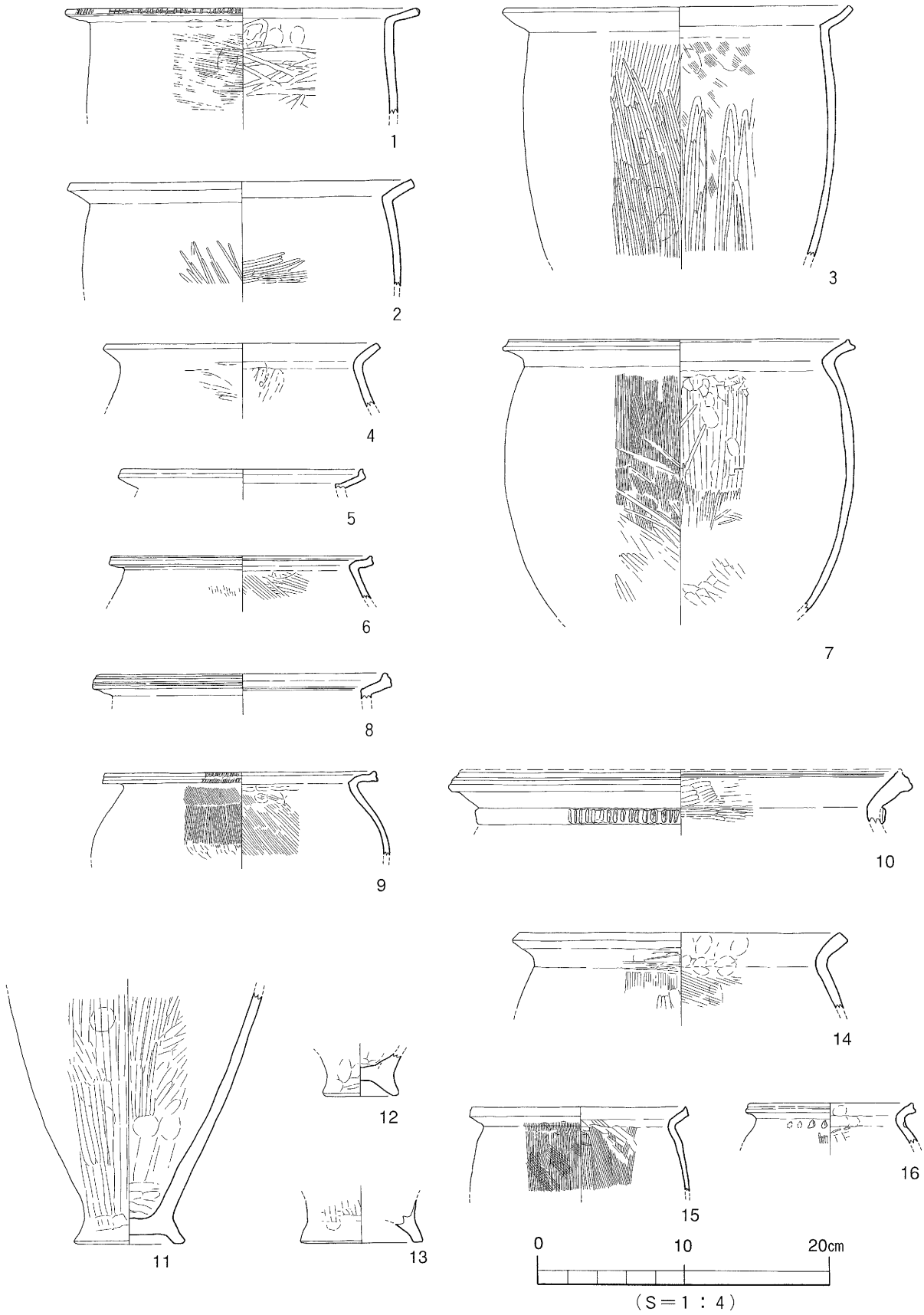
底部穿孔土器（47）　47は焼成後の穿孔をもつ。

縄文土器（48）　48は、深鉢の口縁部片である。外面には条痕が看取される。縄文時代後期。

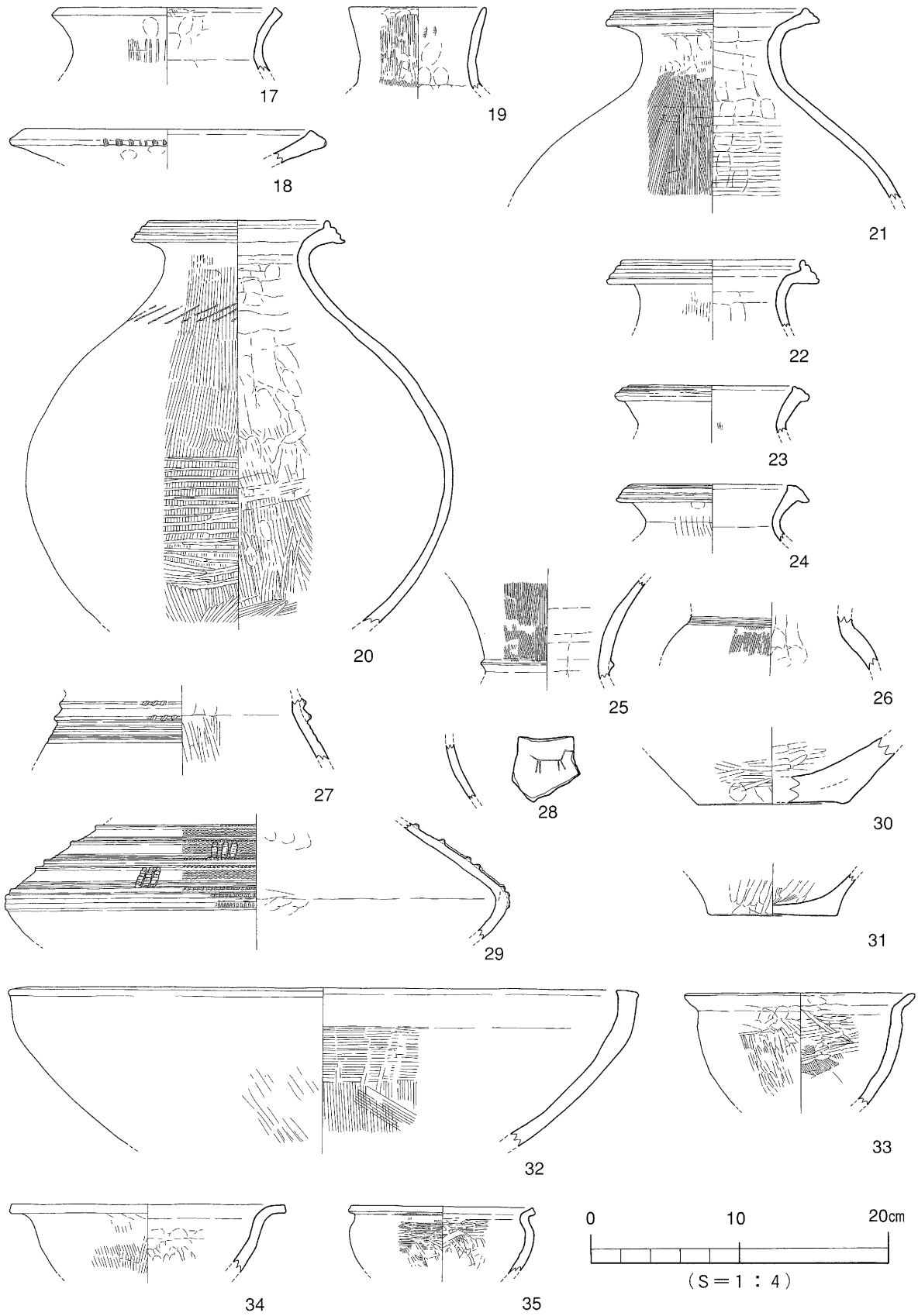
埴輪（49）　49は、幅狭まで、低い断面台形状のタガをもつ。

古墳時代土師器（50）　50は、高坏の坏底部片である。柱部との接合痕を顕著に残す。５世紀後半～６世紀に比定される。

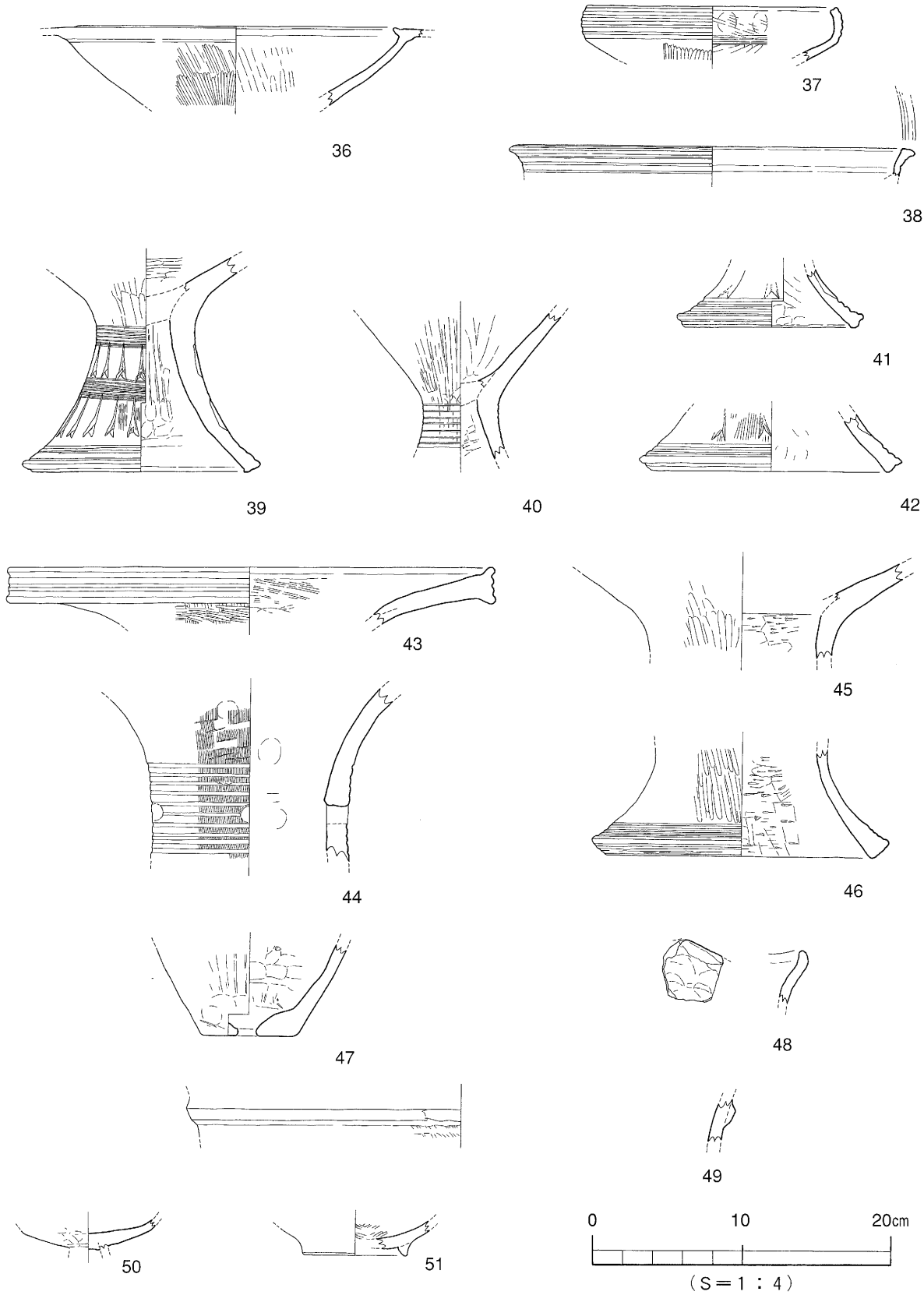
古代土師器（51）　51は、内黒椀の底部片である。しっかりとした輪高台をもつ。11世紀後半に比定される。



第３図　Ａ地点出土遺物実測図（1）



第４図　Ａ地点出土遺物実測図（2）



第5図　A地点出土遺物実測図（3）

2．Ｂ地点の調査

昭和47年10月、神社の改築工事に伴って調査をする（第１図、図版３）。

現在の本殿の南にある太鼓台の辺りから、土坑を１基検出する。本書では、この土坑の呼称を１号土坑（Ｂ地点ＳＫ１）として報告する。

Ｂ地点ＳＫ１

調査資料がないため、既往の概要をもとにすれば、平面形態は円形、規模は直径２ｍ、深さ50～60㎝である。なかからは、完形品や復元するとほぼ完形品になる甕形土器４点、壺形土器４点、ジョッキ形土器１点が出土した。壺形土器には焼成後に穿孔をほどこしたものがある。したがって、祭祀に使用した土器を、土坑に一括投棄したことがよみとれる。

出土遺物（第６・７図、図版８.９）

甕形土器（52～55）　口縁部は逆Ｌ字状を呈し、底部はくびれて上げ底になる。53は口縁端部の一部に刻目をもつ。

壺形土器（56～59）　56は口縁部が短く外反し、胴部は長胴で、底部は平底になる。口縁部には斜線の刻目がつき、頸部には指頭押圧の突帯がつく。57・58は、口縁部が短く外反し、頸部は短く筒状で、胴部は胴中位が強く張る。頸部には断面三角形の突帯がつき、58には口縁端部に２条の沈線がつく。57は口縁端部が、欠損している。59は、小型品の短頸壺で、長胴で、上げ底をもつ。なお、57・58には、焼成後の穿孔が胴部下半にある。56・59は石膏復元部分があり、59は焼成後の穿孔が胴部下半にありそうで、56は石膏復元部分が広く判断できない。

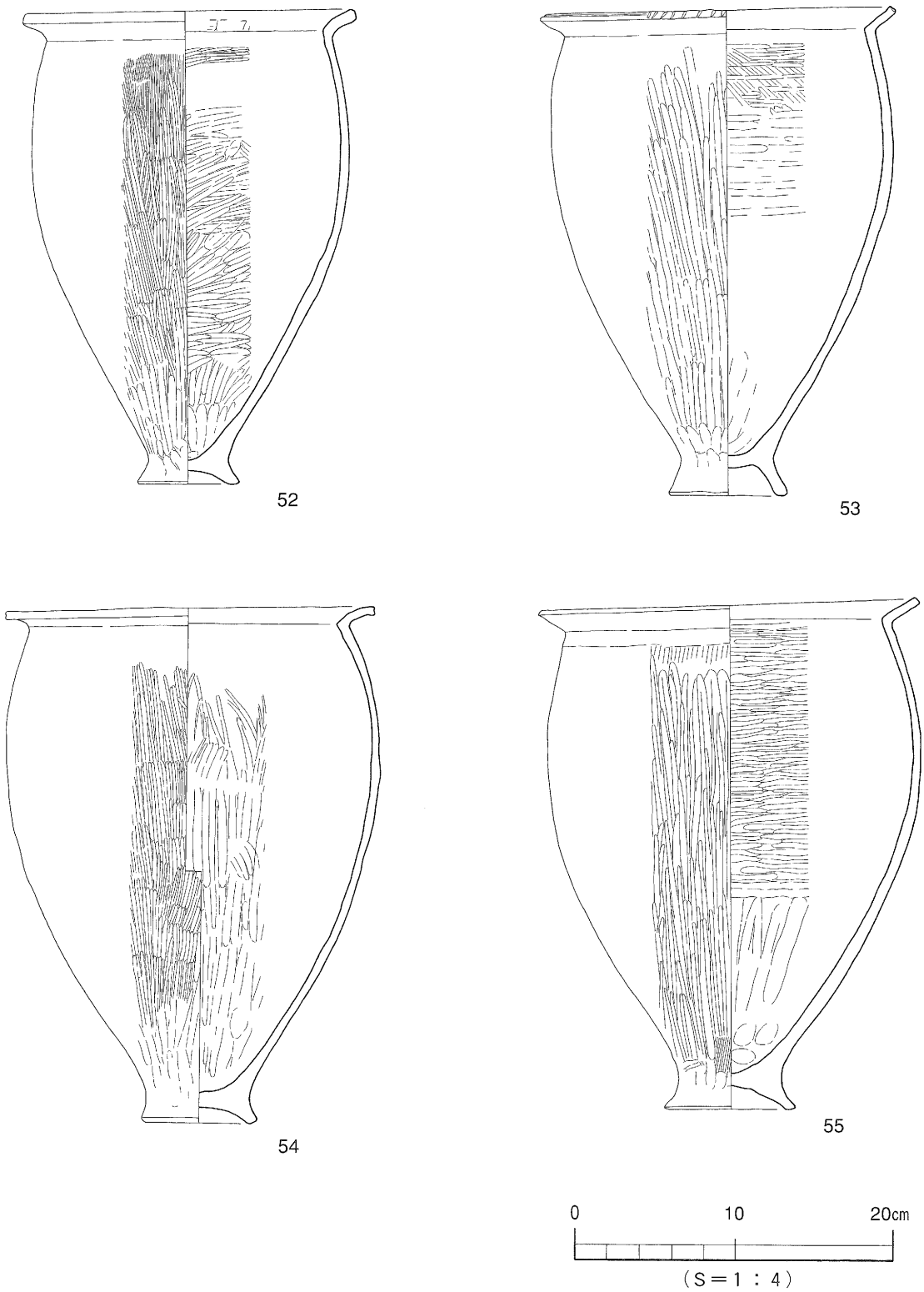
60は、把手付きの無形壺で、いわゆるジョッキ形土器になる。口縁部外面には、沈線３条と「ノ」字状の刻目文がつく。胴部下半には、焼成後の穿孔がある。

時期：出土遺物から、弥生時代中期後葉に比定する。

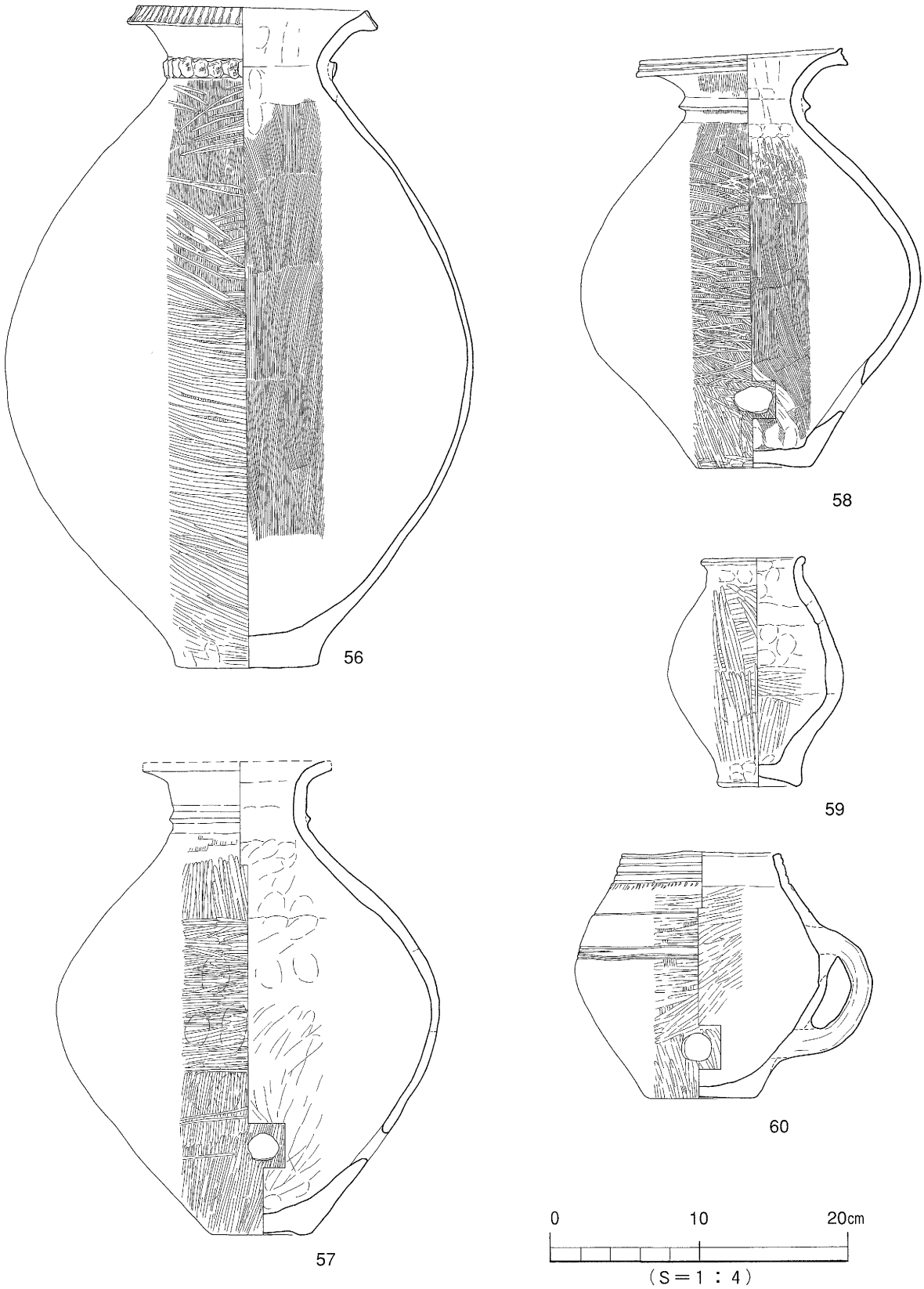
さて、この土坑資料は、『ふたな　創刊号』（長井数秋1977）、『松山市史資料集　第１巻』（松山市1980）、『愛媛県史資料編　考古』（愛媛県1986）、『松山市史資料集　第２巻』（松山市1987）等に資料紹介されている。

今回の整理の結果、『ふたな　創刊号』の掲載土器２・５は、Ｂ地点ＳＫ１の出土品ではなく、２は本報告書第11図79となりＥ地点SK1出土品、５は本報告書第４図20となりＡ地点出土品であることを発掘調査担当の森　光晴氏に確認していただいた。

そこで、この誤りが、どうして生じたかを記しておく。東雲神社遺跡資料は、発掘調査担当者の承諾なしに、担当事務官が遺物の資料化を長井数秋氏に依頼した。その折りに出土地点と遺物の照合に誤りが生じたまま、遺物の受け渡しが行なわれた。遺物には注記がなく、誤りに気付くことはできない状況にあった。また、概要報告は、本報告の予定が全く望めない状況であったため、長井氏が資料の重要性と資料の風化を鑑みて、雑誌『ふたな　創刊号』にて紹介したものである。それが、のちに『松山市史資料集　第１巻』、『愛媛県史資料編　考古』、『松山市史資料集　第２巻』等で転載されるようになったのである。



第６図　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物実測図（1）



第７図　Ｂ地区ＳＫ１出土遺物実測図（2）

３．Ｃ地点の調査

昭和47年10月、神社施設改築のための作業道建設に伴って調査をする。

作業道は、神社本殿の南側を迂回するもので、調査地点は、現在の宝物館の西側橋脚に接する場所になる（第１図、図版３）。調査の結果、横穴式石室１基と箱式石棺１基を検出した。本書では、この横穴式石室を１号横穴式石室（Ｃ地点の１号横穴式石室）、箱式石棺は１号箱式石棺（Ｃ地点の１号箱式石棺）として報告する。

Ｃ地点１号横穴式石室

Ｃ地点１号横穴式石室は、箱式石棺を切っており、石室の石は抜き取られ、石室の基底石の痕跡を検出したにとどまる。墳形は判断できず。開口方位は、東を向く。出土遺物は、石室内に限られ、鉄剣１点、鉄製刀子１点、鉄鏃の茎２点、ガラス小玉約100点、臼玉６点、完形の須恵器壺２点、弥生土器片がある。このうち、完形の須恵器壺２点は、奥壁に近い位置で出土している。

出土遺物（第８・９図、図版６・７）

鉄剣（61）　関は斜関で、茎には釘目がある。表面には、木質が見られる。全長43.6㎝、身長34.6㎝、身幅3.7㎝、茎長約9.0㎝、茎幅1.5㎝である。

鉄製刀子（62）　身と茎との境部分が残る。茎には、骨角の柄が見られる。

鉄鏃（63・64）　茎の小片で、断面が長方形を呈する。

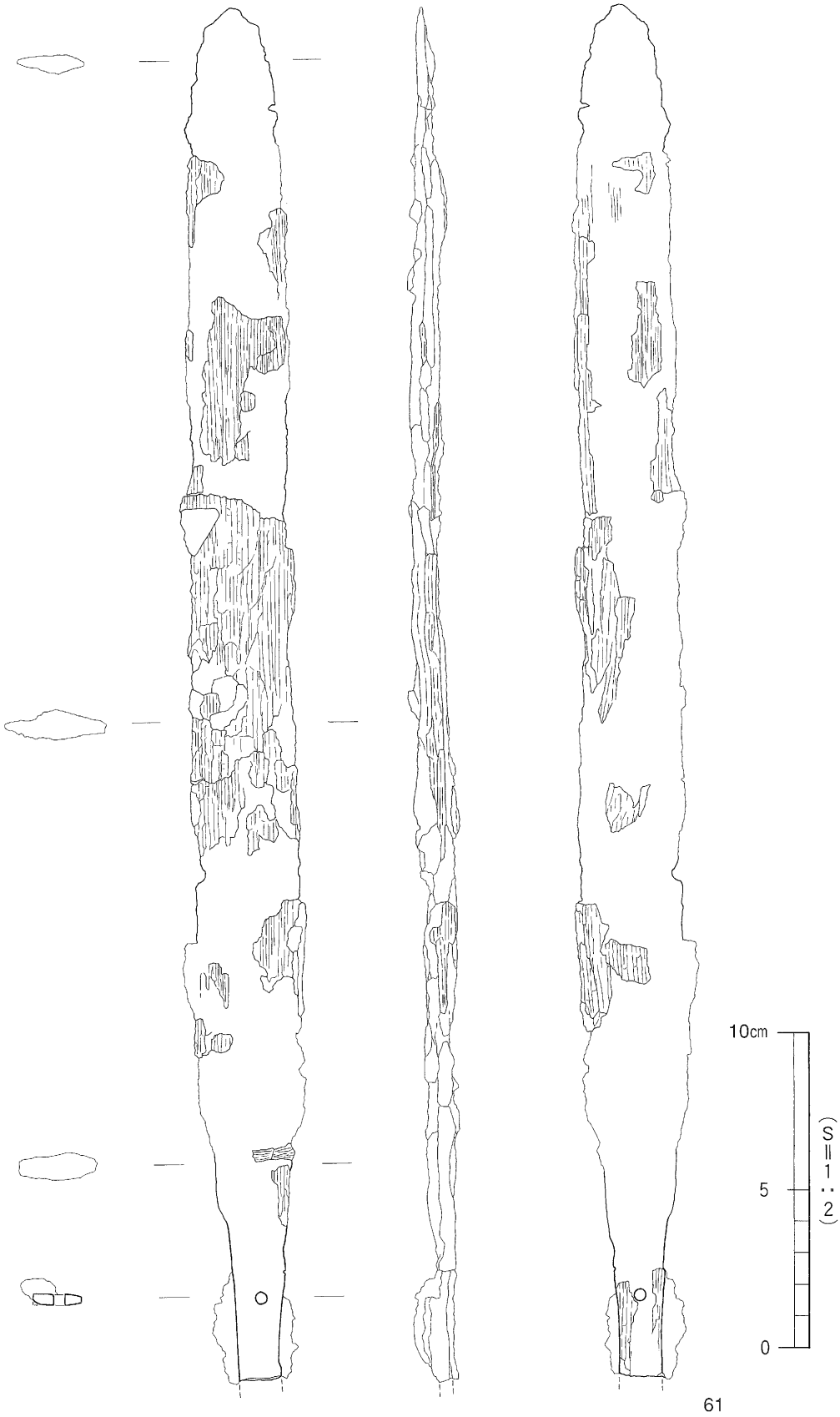
さて、ガラス小玉、臼玉、須恵器壺は、所在がわからない。調査時の所見では、ガラス小玉は青色が多く、黄・緑・乳白色のものもみられた。臼玉は、滑石製で、薄いものであった。須恵器壺は完形品で、短頸壺であった。

時期：出土の須恵器壺から６世紀とみられる。

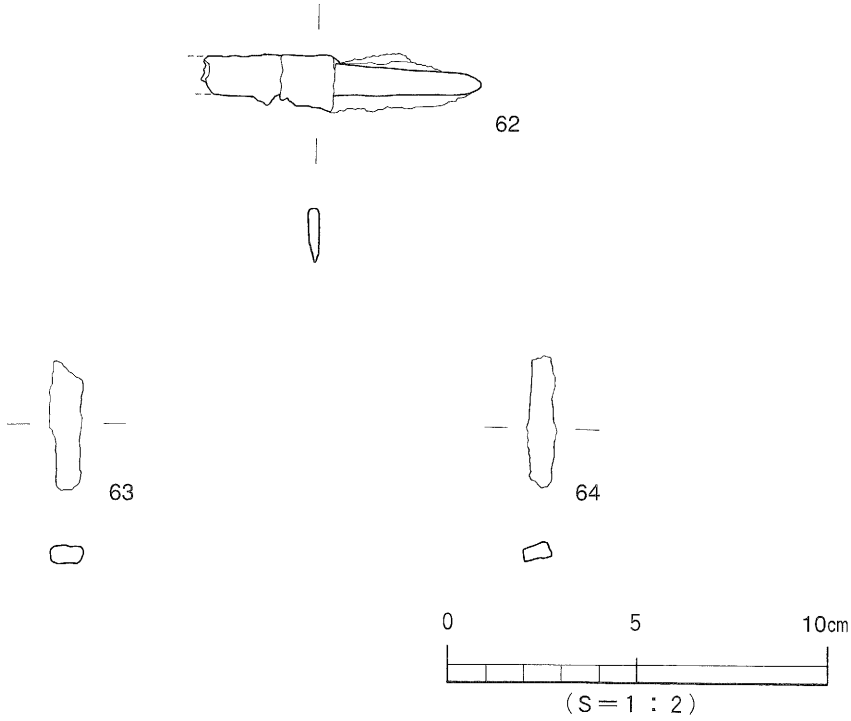
Ｃ地点１号箱式石棺

Ｃ地点１号箱式石棺は、Ｃ地点１号横穴式石室に切られている。石棺は、検出したにとどまる。石棺の長軸は、南北をむき、南側は１号横穴式石室の築造で消滅し、北側木口部は調査地外にいたる。側板石は緑色片岩であった。

時期：当平野の箱式石棺の築造傾向をみて、古墳時代前期から、Ｃ地点１号横穴式石室構築の６世紀までにおける。



第８図　Ｃ地点１号横穴式石室出土遺物実測図（1）



第９図　C地点１号横穴式石室出土遺物実測図（2）

4．D地点の調査

D地点の調査は、昭和47年10月、C地点の調査と同時期である。

C地点一帯の掘削土をD地点に盛り上げていた（第１図、図版３）。資料は、その盛り土から採取したものである。採取品は須恵器（コンテナ２箱分）に限られた。

出土遺物（第10図、図版10）

65～76は、採取した須恵器で、時期は５世紀末～６世紀初頭にあてる。これらの須恵器は、C地点およびその周辺に存在していた古墳に伴うものであろう。

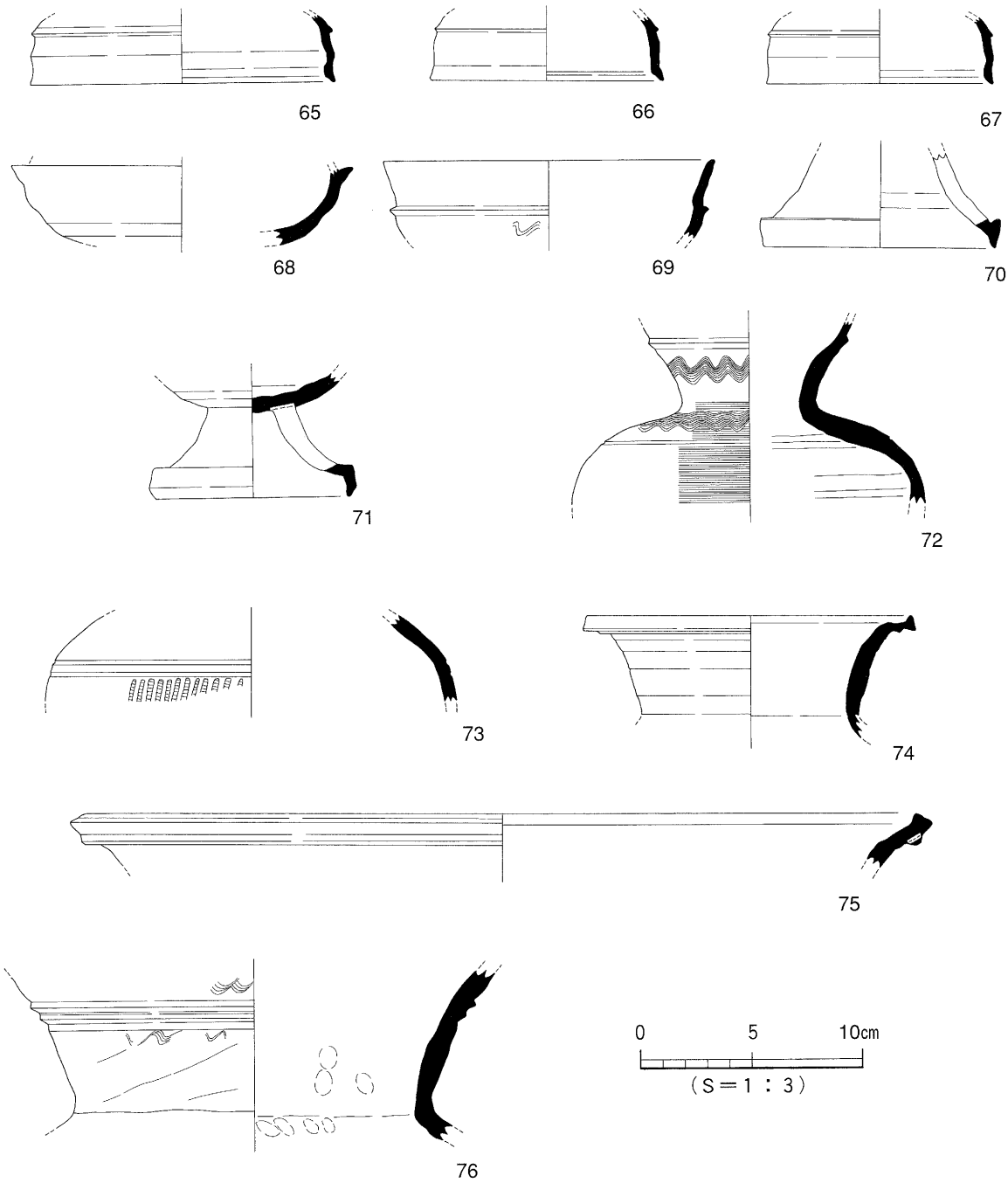
坏蓋（65～67）　口縁部は内傾する段をもち、稜は短く丸い。

高坏（68～71）　68・69は坏部で、68は有蓋、69は無蓋の高坏になる。70・71は脚部で、端部は70が面をなし、71は凹凸をなす。

𤮔（72）　72は頸部と胴部に波状文を施す。

壺（73）　73は胴部に刺突文をもつ。

甕（74～76）　74は中型品、75・76は大型品で、76は頸部に波状文をもつ。



第10図　D地点出土遺物実測図

５．Ｅ地点の調査

Ｅ地点の調査は、昭和47年10月、本殿の外縁をはしる作業道の北側の拡張工事に伴って実施された（第１図、図版３）。

遺構は、本殿と作業道との境部分で、土坑１基と、土坑中から土器を検出している。本書では、この土坑を１号土坑（Ｅ地点ＳＫ１）として報告する。

なお、Ｅ地点ＳＫ１の調査は露出した土器を取り上げただけで、それ以上の調査は実施していない。調査後には、一帯が崩壊しないように土嚢で表面を覆った。現在でも、その土嚢は確認できる。

Ｅ地点ＳＫ１

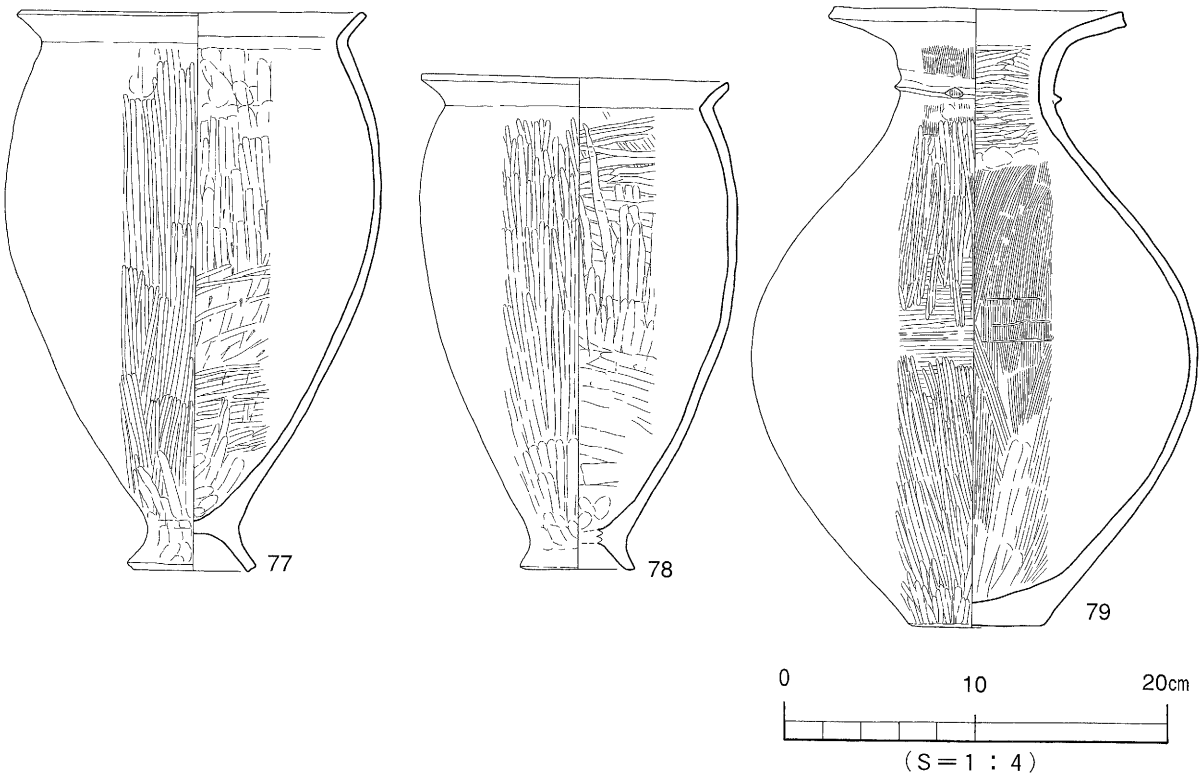
作業道の北側壁面で、検出したものである。詳細な資料はないが、遺構の規模や遺物の出土状況、遺物の遺存状況はＢ地点ＳＫ１に類似していた。遺物は、露出していた土器だけを取り上げ、ほぼ完形の甕形土器２点と壺形土器１点がある。

出土遺物（第11図、図版10）

甕形土器（77・78）　口縁部は上外方に立ち上がり、長胴で、底部はくびれて上げ底になる。

壺形土器（79）　口縁部は外反し、頸部は筒状、胴部は中位が張る。頸部には、断面三角形の突帯をもつ。突帯上には、指頭跡が部分的につく。

時期：出土土器の特徴から、弥生時代中期後葉に比定する。



第11図　Ｅ地点ＳＫ１出土遺物実測図

6．F地点の調査

F地点の調査は、昭和47年10月、C地点の調査と同時期に行なわれたものである。地表面での遺構と遺物の確認調査（踏査）にとどまる。宝物殿の北側正面辺りになる（第1図、図版4）。

調査の結果、埴輪片が弧状に分布していることを確認した。その状況からして、円筒埴輪が墳丘上で、同心円上に配列されていたことがよみとれる。

現在は、その埴輪片列は見えない。ただし、今回の現地確認調査では、本殿縁辺で埴輪片を採取することができた。第12図80の埴輪は、今回の現地確認調査採取したものである。ただし、この埴輪と過去に検出した埴輪片列の埴輪が同じであるかは、判断できなかった。

また、埴輪片列の北約20ｍには、黒い土が円形（面）をなして分布していた。竪穴式住居址の可能性がある。遺物の出土はない。

現況では、はっきりとした土の違いは分からない。

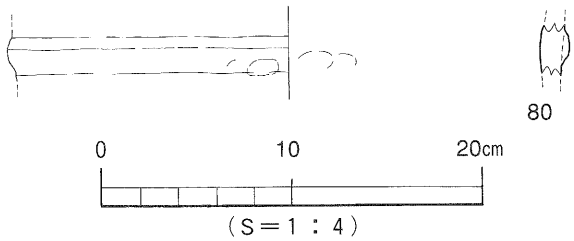
7．G地点の調査

G地点の調査は、昭和48年、宝物館の改築前に実施したものである（第1図、図版4）。

現在の宝物館の南に位置し、トレンチ調査を行なった。トレンチは、古墳と目される位置に、東西と南北に、十字になるように設定した。トレンチ規模は、幅約1ｍ、長さは南北約36ｍ、東西約12ｍとした。調査の結果、前方後円墳に成る可能性も認められたが、断定するには至っていない。遺物は出土していない。

現在、この地点の北側は整地され、この地の東端には東雲遺跡の標柱がある（第13図）。

なお、G地点の東側には、作業道までの間に古墳が2基存在しているようである。現状でも、小さな盛り上がりは確認できる。



第12図　平成12年採集遺物実測図

第３章　調査の成果と課題

松山城のある勝山は、大正時代から古墳の存在が知られ、これまでに多くの研究者によって、踏査による分布調査がおこなわれてきた。その一方、本格的な調査は近年になるまでなく、今回報告の東雲遺跡の調査は、勝山では最初の本格調査といえる。

神社ここでは、東雲遺跡の調査所見を周辺遺跡との比較のなかで時代をおって述べていく。

縄文時代　神社

Ａ地点では、縄文後期の土器片を採取した。東雲遺跡が含まれる道後城北地区では、文京遺跡で縄文後期土器の出土と焼土痕の検出がある（宮本一夫1990）。よって、この地域に集落の存在は確認されているものの、同時代の資料の出土量と分布数は未だ少ない。それ故、本資料は稀少資料として重要になってくる。問題は、本資料が帰属する集落の特定である。出土地点に隣接して集落があるのか、勝山の高所部にあるのかは、今回の資料では結論がだせない。今後の調査に期待したい。

弥生時代

Ｂ・Ｅ地点では遺構を、Ａ地点では遺物を検出した。遺構は弥生時代中期後葉に、遺物は中期後葉～後期前葉に時期比定されるものであり、集落が短期間であったことが分かってきた。

Ｂ・Ｅ地点の遺構は、いずれも遺物の出土状況と遺存状況から祭祀行為の所産である。松山平野の弥生時代中期の集落祭祀資料は、遺構では周溝状遺構、遺物では分銅形土製品が著名であるが、本例のような完形の土器が一括して土坑から検出された例は未だない。祭祀の対象が、課題になる。

さて、Ｆ地点の北20ｍでは、面的に土色が異なる部分を検出し、竪穴式住居址の存在を推定した。さきの土坑との関係は興味深く、確認の必要がある。

遺物では、絵画土器の出土が特出される。松山平野での弥生絵画を含む線刻土器の出土は、200点以上で、うち鹿を描いたものは７点ある。本資料の特徴は、細線で、単線で描くところにある。貴重な一点である。

古墳時代

古墳と土器を検出した。

古墳は、Ｃ地点で埋葬施設を２基、Ｆ地点で埴輪列１基、Ｇ地点で墳丘（推定を含む）を３基確認した。東雲神社一帯に古墳が存在していることは、地元では多くの人が知るところであり、平成３年３月刊行の愛媛県教育委員会の『愛媛県内古墳』（愛媛県教育委員会1991）にも東雲神社古墳として３基が認知されている。同書の市町村別古墳一覧「10　松山Ⅱ」（ｐ.100）によると、Ｃ地点の埋葬施設２基は「251東雲神社１号墳」に、Ｆ地点の埴輪列は「252東雲神社２号墳」に、Ｇ地点でトレンチ調査をした墳丘は「253東雲神社３号墳」に対応することになる。

そこで、問題が幾つか生じてくる。

①まず、東雲神社１号墳は、本来は２基の古墳が切りあっているものであり、呼称を修正しなければならない。しかし、この古墳はすでにその多くが消滅しており、２基の古墳の構造や規模が確認できない。したがって、全く別の呼称にすることは、かえって後世に混乱をきたすため、ここでは箱式石棺を東雲神社１号墳Ａ、横穴式石室を東雲神社１号墳Ｂと改名したい。なお、遺物が出土したのは、箱式石棺内ではなく、横穴式石室の東雲神社１号墳Ｂである。

②G地点の墳丘が前方後円墳であるかは、いま一度詳細な調査が必要であろう。くわえて、G地点の東にある墳丘様のもの2基の確認も必須である。
③これは、細かいところであるが、『愛媛県内古墳』の地図「10　松山Ⅱ（分布図）」（p.107）における東雲神社1～3号墳の位置が誤っていることである。縮尺を鑑みても、古墳の位置関係を整理すると、東雲神社の東側から東雲神社3号墳→2号墳→1号墳の順序になる。よって、古墳番号は東から253→252→251に変更していただきたい。

遺物では、D地点出土の須恵器が注目される。古墳に伴うものと思われ、東雲神社古墳群の成立は古かったことが伺われる。

なお、今回の報告書作成中に、「東雲神社」の注記のある埴輪が見つかった。脱稿後であったため、別章として資料提示をした。

古　代

土器が1点出土している。同地が、集落として機能していたかは定かでなく、今後の課題を提示するものになった。

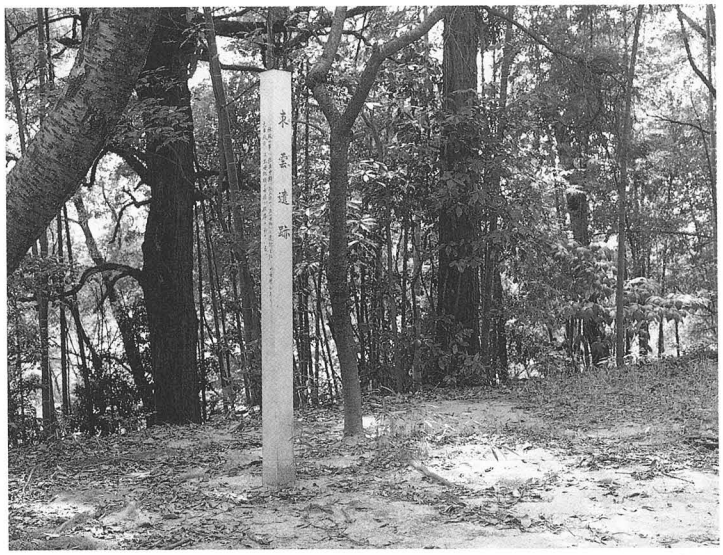
以上、東雲神社境内にて行なった埋蔵文化財の調査について所見をのべた。縄文時代以後、各時代で生活の跡が確認された。特に、弥生時代では居住地として、古墳時代には墓域として、この地域の主要な位置を占めてたことを推測できる資料を得た。確認されなければならない事項も明確にされた。今後の継続的な調査と、その成果に期待したい。

今回の報告書では、過去に提出された概要報告と著しく異なる点も生じている。これは、ただただ本報告が提示できなかったことに原因がある。一方では、本報告を作成できなかった状況もそこにはある。関係者の方々には、ご迷惑をおかけすることになったが、お許しいただきたい。

20年を経過して報告書を作成することになったが、当時の成果を十分に掲載することができなかった。発掘調査の意義が問われているものと考える。今後の調査の教訓にしたい。

【文　献】

宮本一夫編　1990　『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
愛媛県教育委員会　1991　『愛媛県内古墳』



第13図　G地点の現況（北西より）

付章１　東雲神社遺跡出土品

東雲神社遺跡の調査報告書を脱稿後、コンテナ（39×55×14㎝）１箱分の埴輪が見つかった。この埴輪は、C地点東側の斜面付近の二次推積土から採集した埴輪であることが分かった（西尾幸則氏の教示）。C地点調査と同時期の採集である。形象埴輪もあり重要なので、別章として資料紹介をすることにする。（梅木）

出土遺物（第14・15図、図版11・12）

埴輪（１～16）

出土した埴輪は土師質で、小破片が殆どであり、その全容を知ることの出来る個体は皆無である。そこで、各部位ごとにその概要を説明する。

１～３は円筒埴輪の口縁部である。１は内傾した口縁を持つが、これは焼成による歪みが原因であろう。器面調整は、外面をナナメハケ後ナデ、内面指オサエ・ナデを施している。２・３は外傾した口縁を持ち、１と同様な調整を施している。なお、１～３は共通して、口縁端部がやや窪む形状である。

４・５は胴部である。外面にはナナメハケ、内面にハケ調整の後に指ナデ・オサエが施されている。

６～８はタガ部である。６は幅狭で低めのタガを持ち、中央部がやや窪む形状である。内面にはタガ貼り付けの際に付いた指オサエが残る。破片の傾きから、朝顔形埴輪の頸部付近の可能性もある。７には円形のスカシ孔が穿たれており、タガも低い台形を呈す。８は胴径が小さいことから、形象埴輪の筒部の可能性がある。タガは７と同様で低い台形を呈し、器面調整も６～８は外面ナナメハケ、内面指オサエ・ナデを施している。

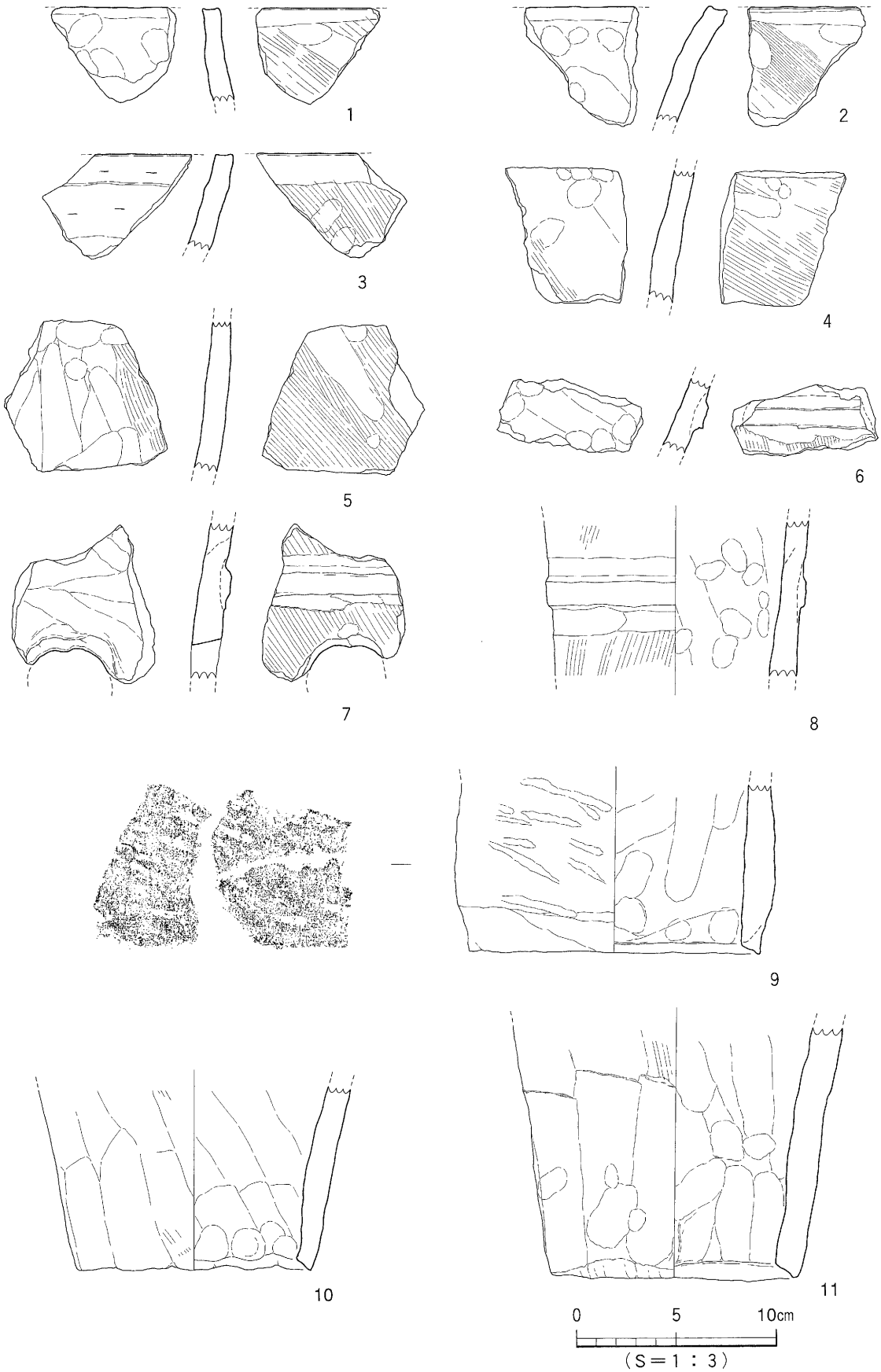
９～12は基底部である。９は内面端部を指オサエ、外面にはナナメ方向の沈線（？）が幾重にも施されていることから、叩きによる底部調整がなされた可能性が高い。10～12は、底部の調整技法が共通しており、外面を板状工具によるオサエ、内面端部を指オサエによりなされている。また、12について注目される点として、タガ上・下部に規則的な圧痕ないし擦痕がみられることが挙げられる。これは従来の断続ナデ技法に加え、その上をヨコナデにより調整した「断続ナデ技法Ａ」（第16図を参照のこと）と判断できるものである（注１）。

13は朝顔形埴輪の肩部付近である。タガ下部に円形のスカシ孔が穿たれており、器面調整は外面をナナメハケ、内面をナデにより施している。また、タガの調整については、12同様、「断続ナデ技法Ａ」が採用されている点も注目される。タガ自体の形状は、低い「M」字状を呈する。

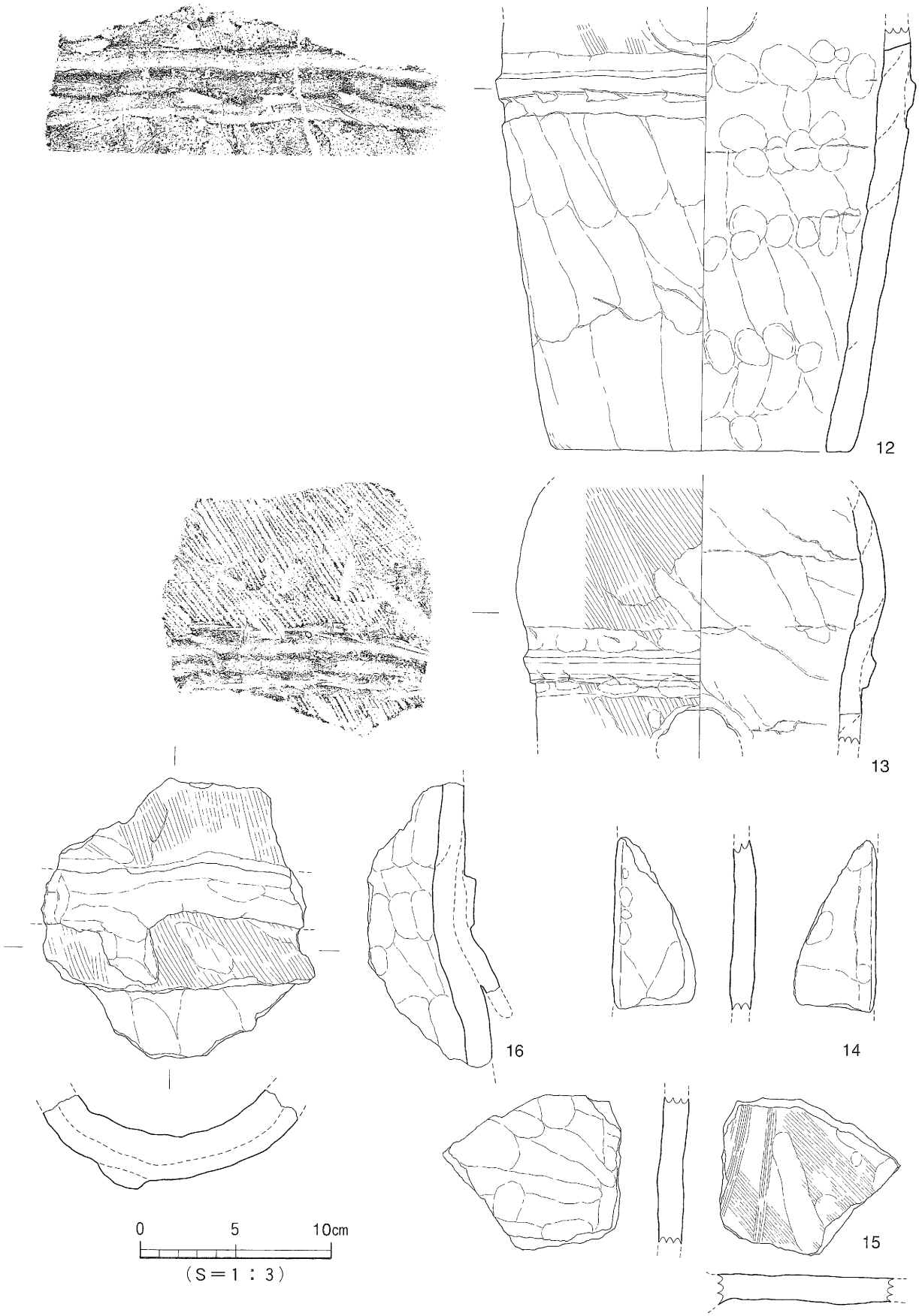
14・15は盾形埴輪片であり、14が盾面端部、15が筒部との接合部付近と推測する。15の盾裏面には、筒部との接合を示す強い指ナデ・オサエが残り、粘土が反っていることが観察できる。表面には不定方向のハケを施す。

16は人物埴輪の衣服・裾付近である。裾はスカート状に大きく開き、器面にはナナメハケを施す。腰紐の表現には低平な粘土帯を貼り付け、結び目から垂れ下がった紐の表現らしきものも観察できる。脚部（台部）にはハケが施されておらず、衣服の表現と区別するものであろう。内面には指オサエ及びナデ調整が施される。

（山内英樹）



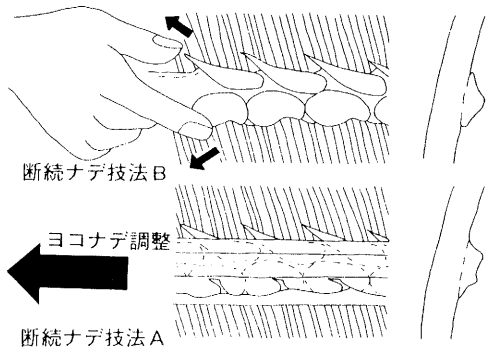
第14図　東雲神社遺跡出土の遺物実測図（1）



第15図　東雲神社遺跡出土の遺物実測図（2）

（注１）この技法を有する埴輪については、近年、坂出市・雄山古墳群の報告の中で詳細に検討がなされている［松本・宮崎 2000］

（文献）松本和彦・宮崎哲治　2000　『県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　雄山古墳群』　（財）香川県埋蔵文化財調査センター



※本図は文献１より転載している。

第16図　断続ナデ技法模式図

写真図版

写真図版例言

1．東雲神社境内の写真は、アサヒペンタックス67で撮影した。

2．遺物は、4×5フィルムで撮影した。

使用機材：

カ メ ラ　トヨビュー４５Ｇ　レンズ　ジンマーＳ　240㎜

ストロボ　コメット／ＣＡ-32・ＣＢ2400（バンク使用）

スタンド他　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フィルム　プラスＸパン・エクタクロームＥＰＰ

3．白黒写真の現像・焼き付けは、大西がおこなった。

使用機材：

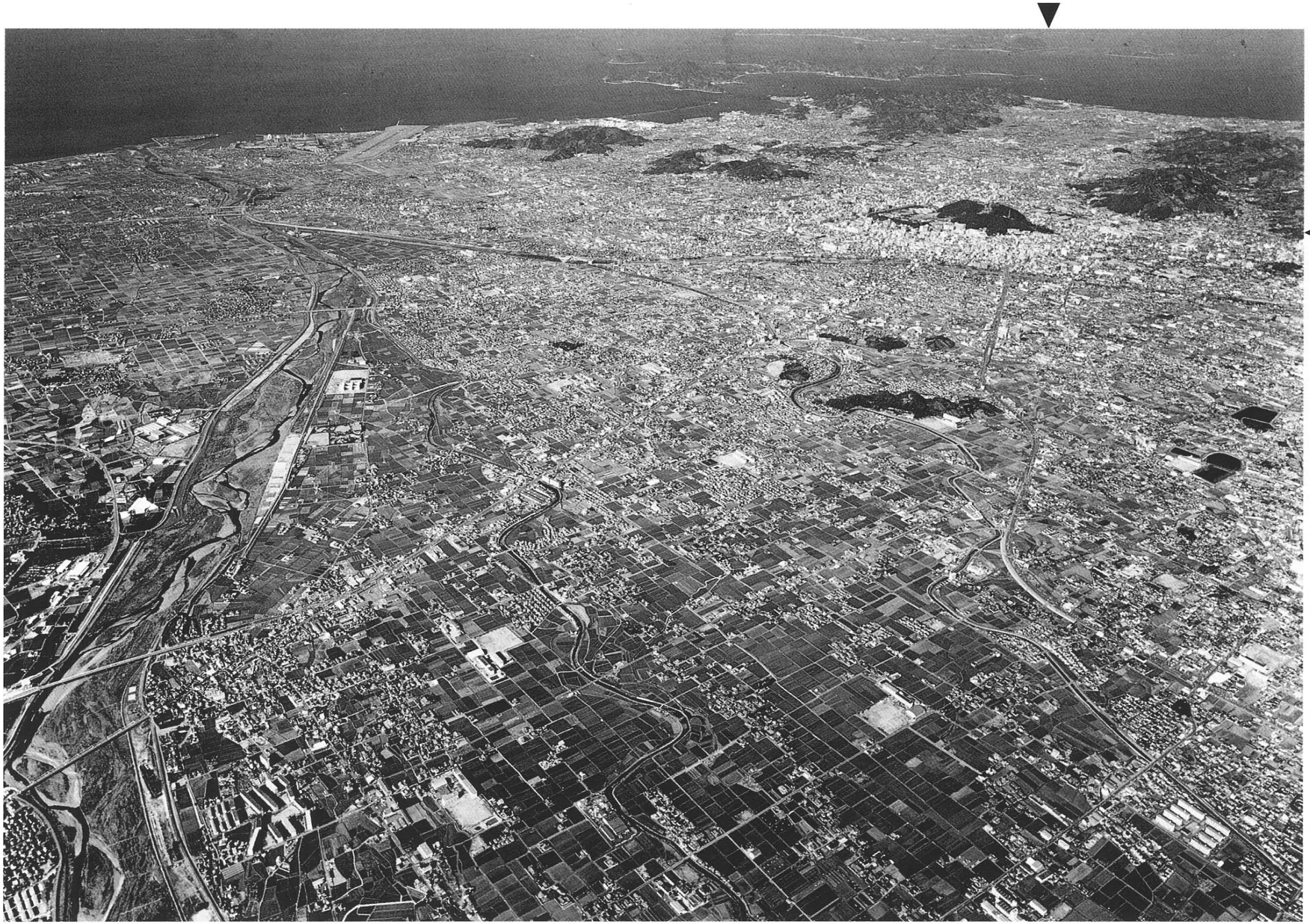
引 伸 機　ラッキー450ＭＤ　レンズ　エルニッコール　135㎜

印 画 紙　イルフォードマルチグレードⅣＲＣ

フィルム現像剤　コダックＤ-76・ＨＣ110

【参考】　『埋文写真研究』Vol.１～10

〔大西　朋子〕



1　調査地遠景（松山平野：南東より）

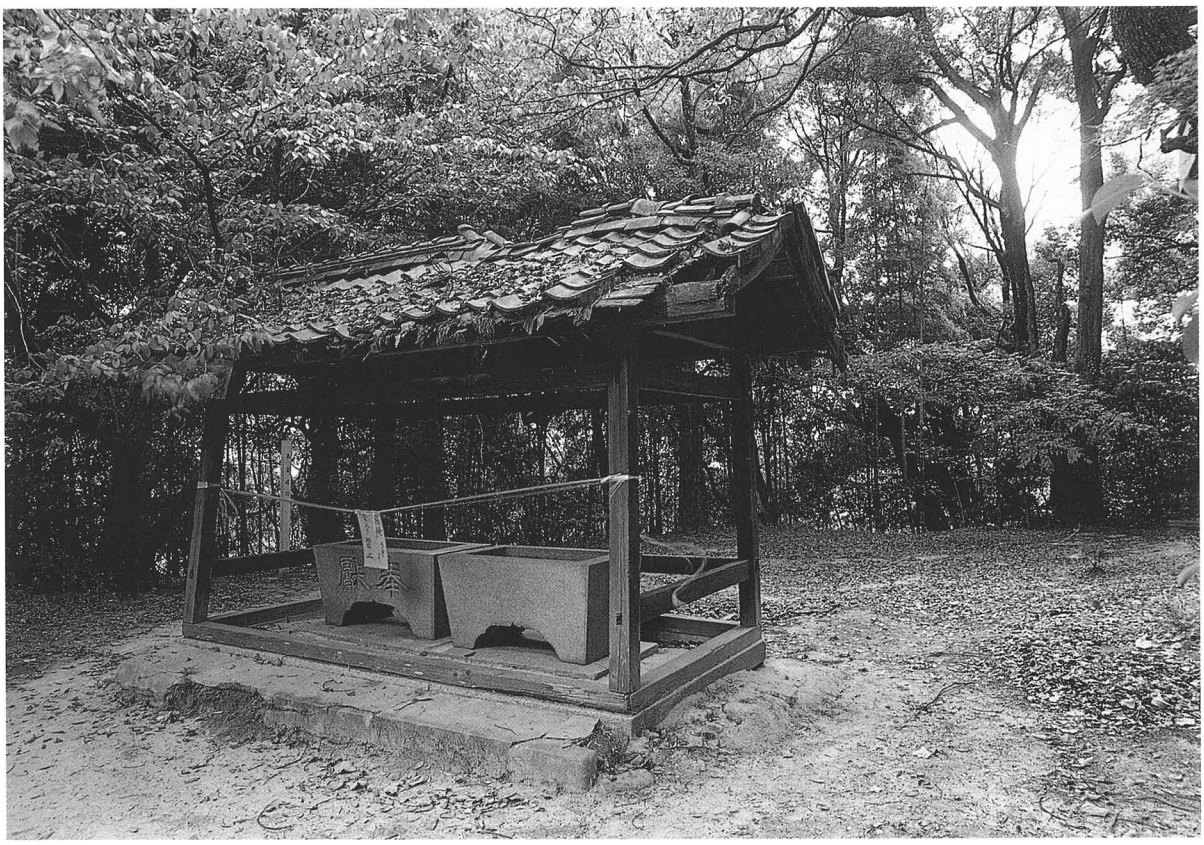
1　東雲神社（東より）

2　A地点の現況（南東より）

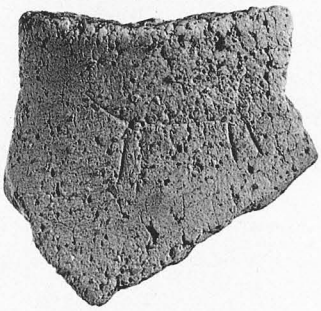
1　Ｂ地点ＳＫ１の現況（東北より）

2　Ｃ・Ｄ・Ｅ地点の現況（北東より）

1　F地点の現況（北より）

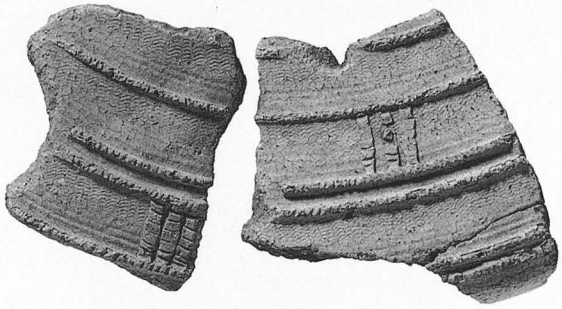


2　G地点の現況（北西より）



28

39

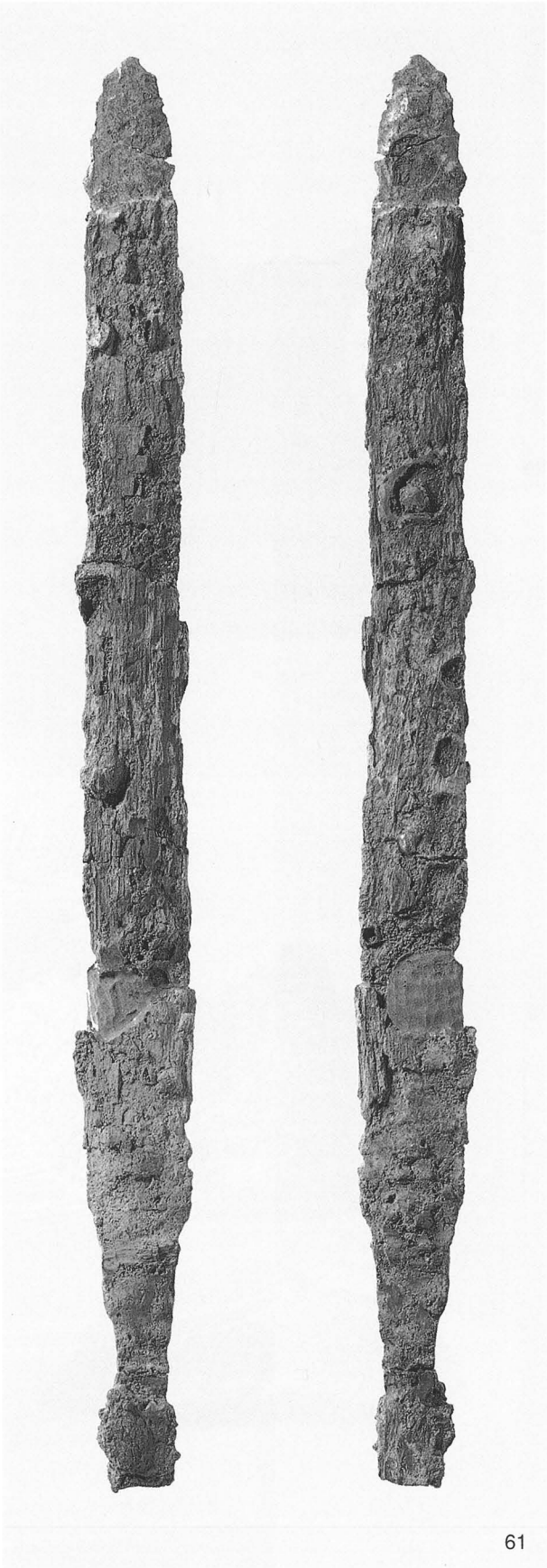


29

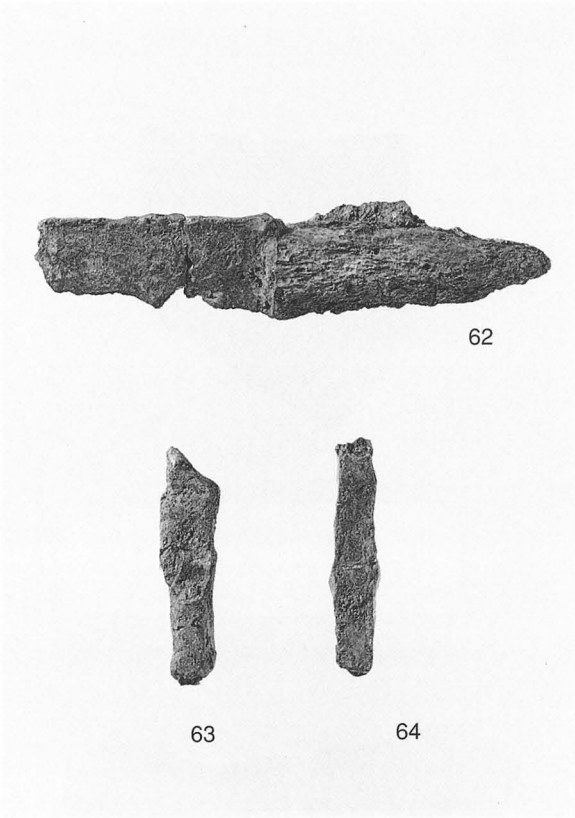
45

46

1　Ａ地点出土遺物



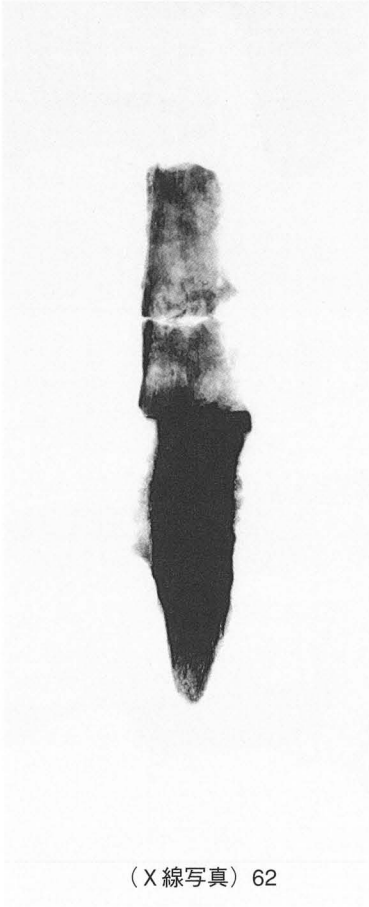
61



62

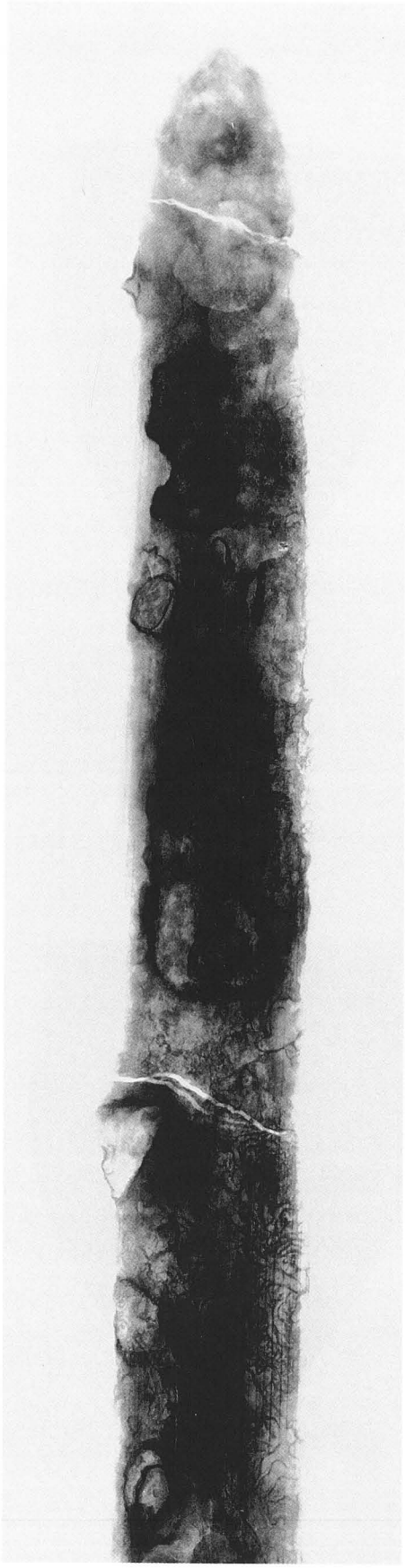
63

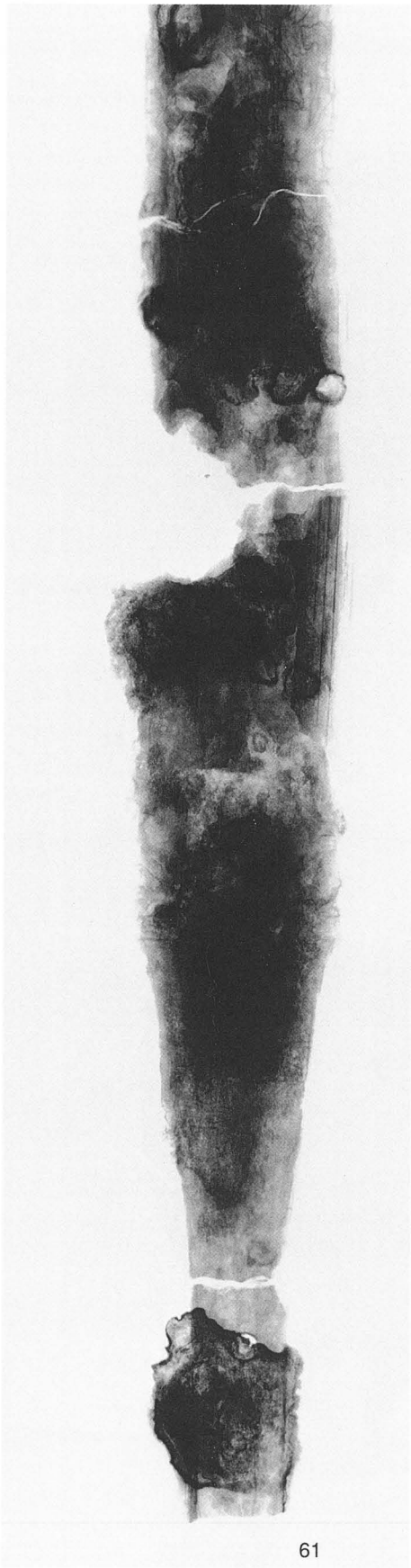
64



（X線写真）62

1　C地点1号横穴式石室出土遺物（1）

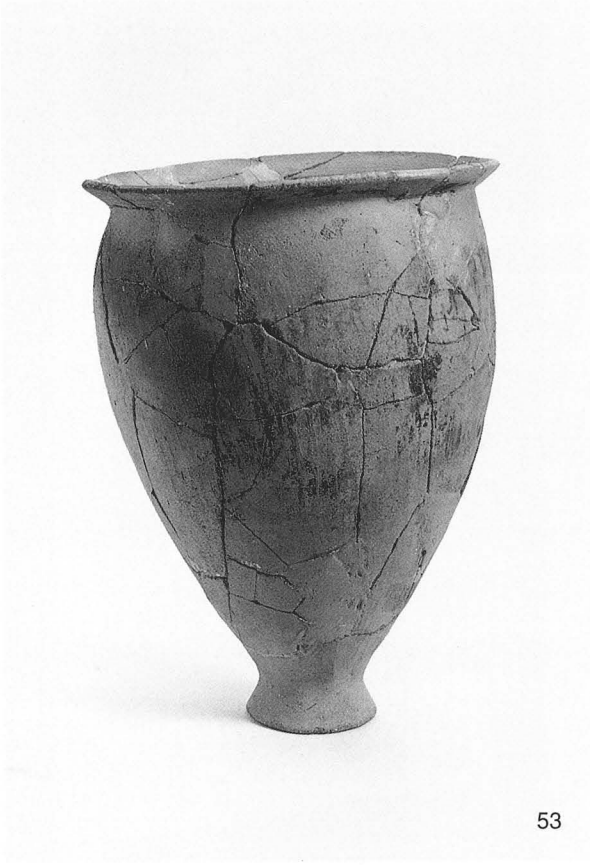




61

1　C地点1号横穴式石室出土遺物（2）　（X線写真）

52



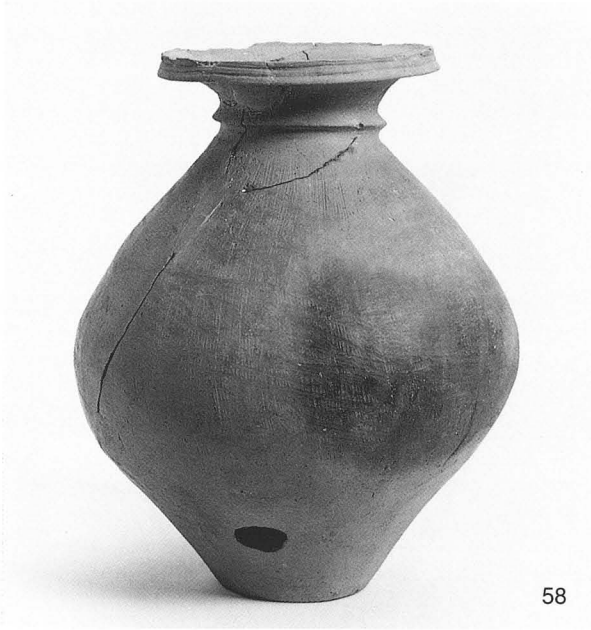
53

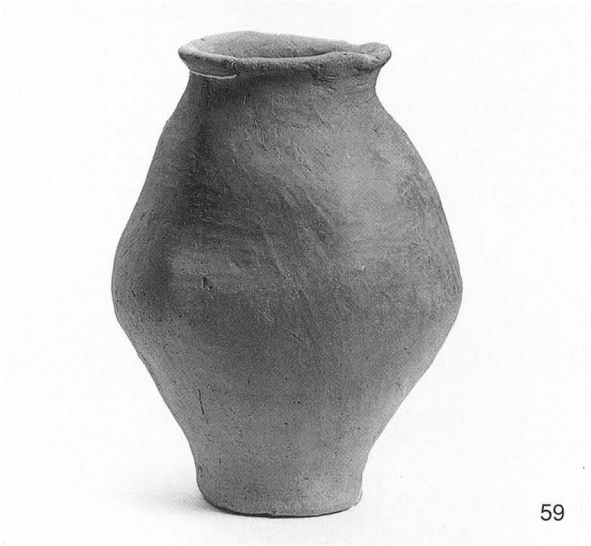
54

55

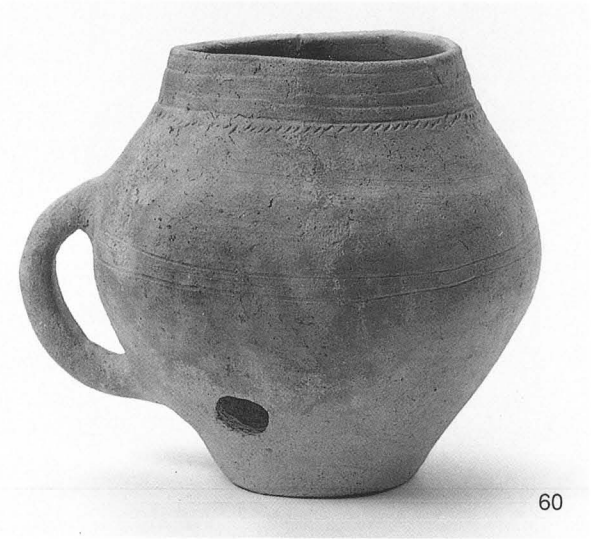
1　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物（1）

56


58


59

57


60

1　Ｂ地点ＳＫ１出土遺物（2）

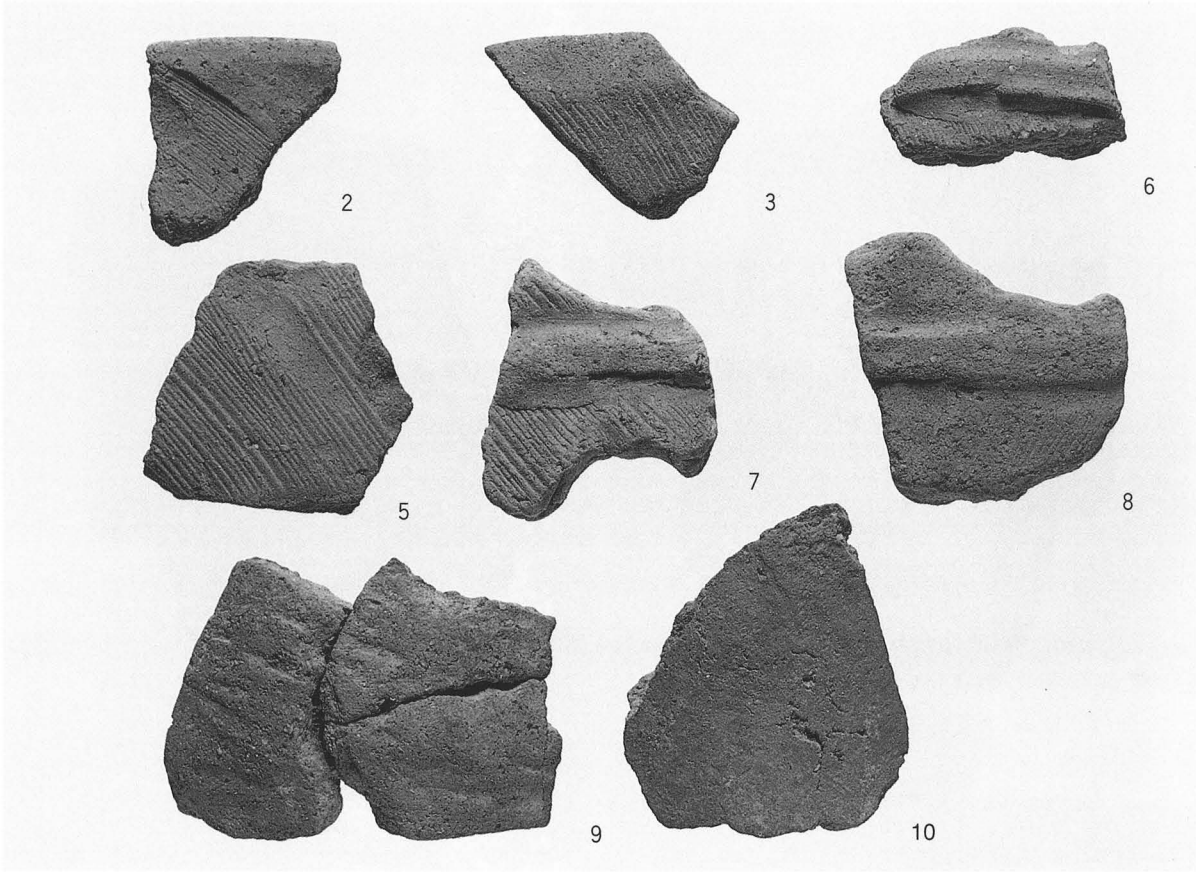
77

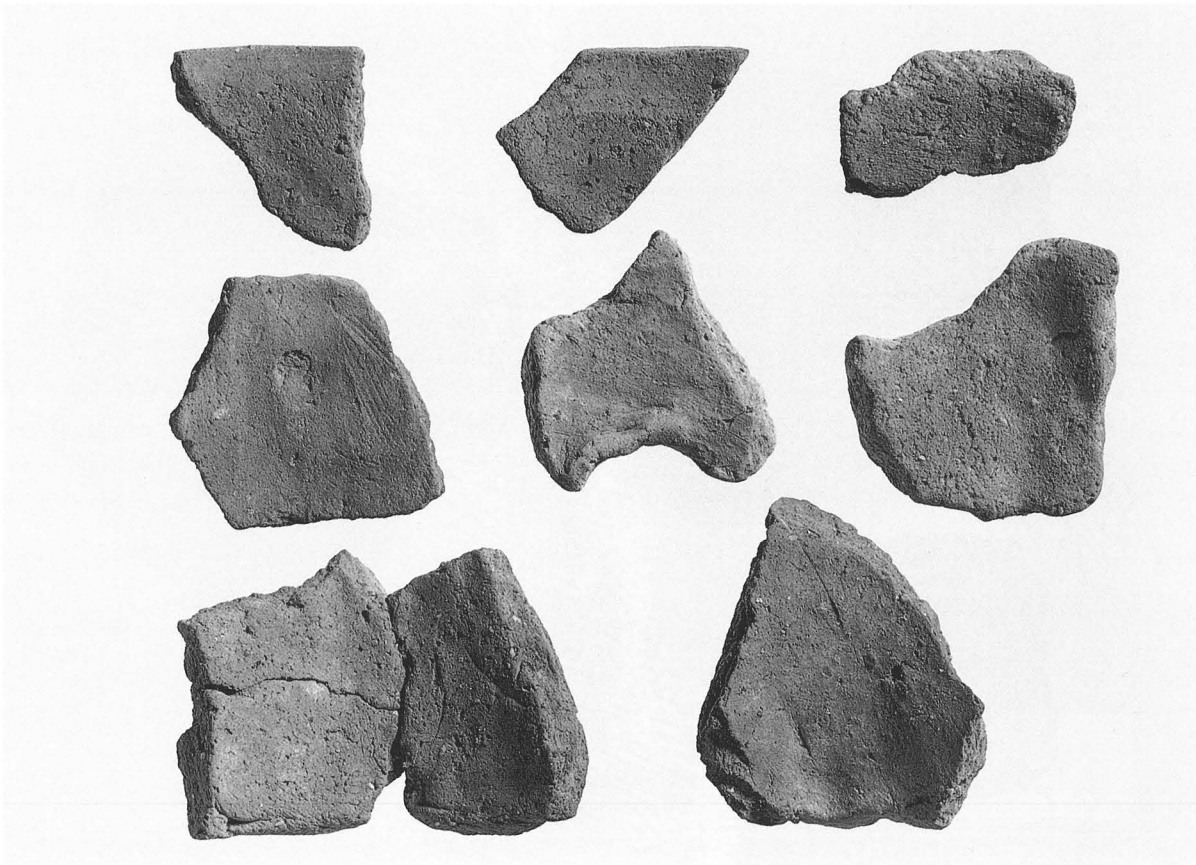
78

79

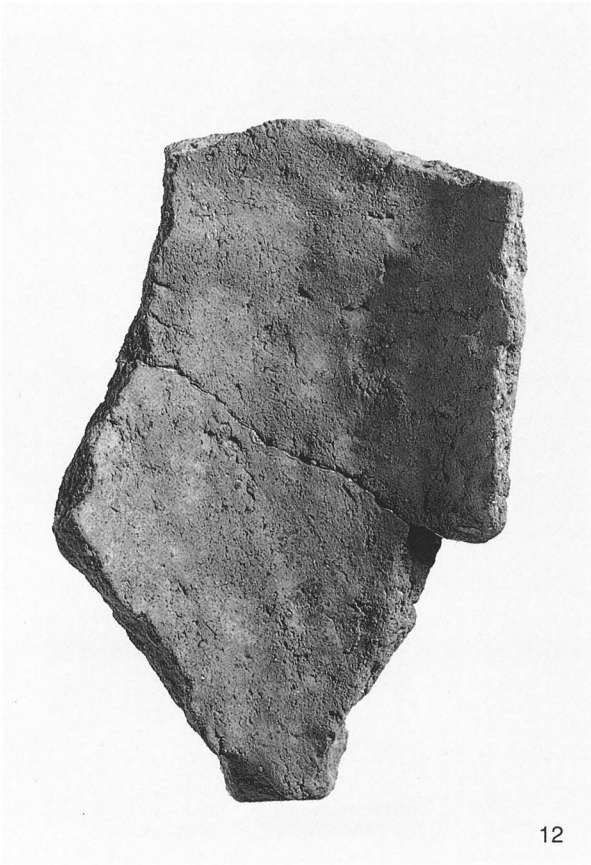
72

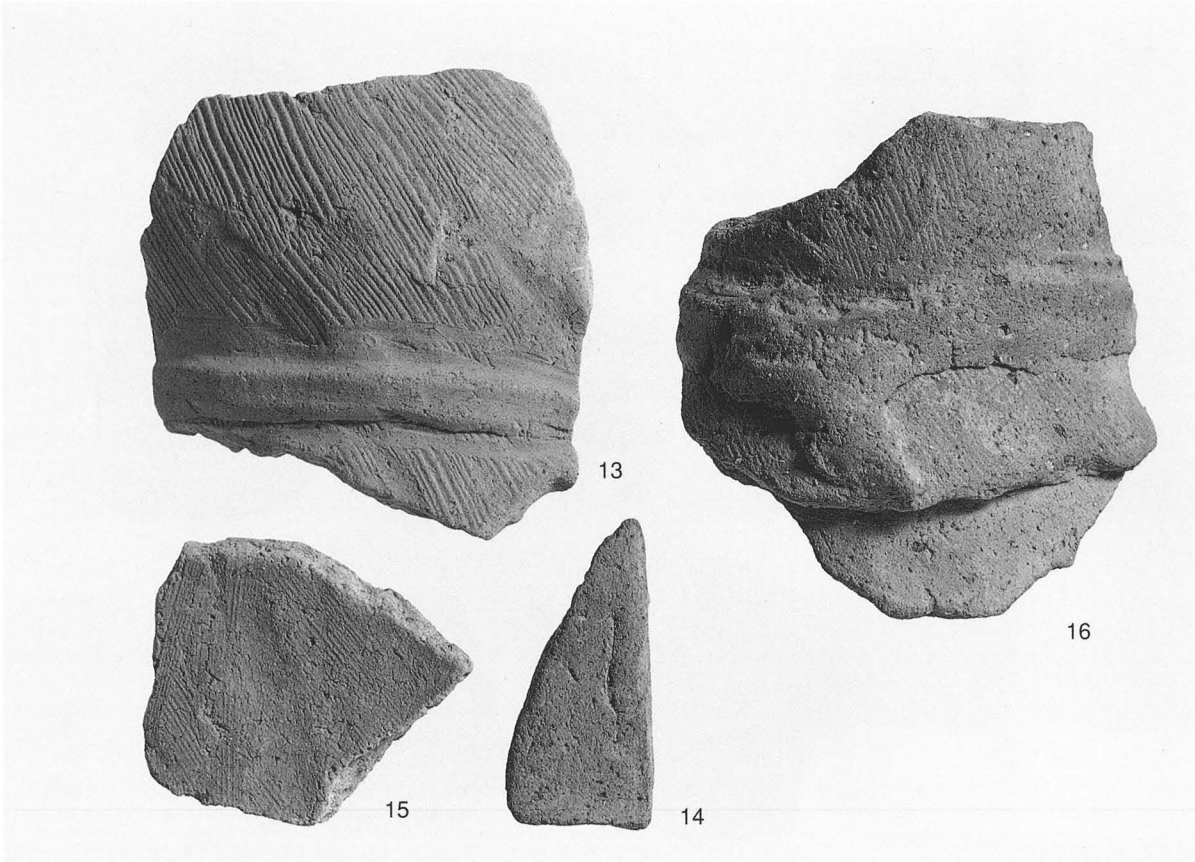
1　D・E地点出土遺物（D地点：72・E地点77～79）





1　東雲神社遺跡出土の遺物（1）





1　東雲神社遺跡出土の遺物（2）

抄　　録

ふりがな	しの のめ じんじゃ い せき
書　　名	東 雲 神 社 遺 跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第79集
編 著 者 名	梅木　謙一・大西　朋子・山内　英樹
編 集 機 関	松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所　在　地	市教委：〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL.089-948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL.089-923-6363
発行年月日	西暦　2001　年　2　月　28　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しの のめ じん じゃ 東 雲 神 社	まつやま しまる の うちちょう 松山市丸ノ内町	38201		33°50′30″	132°46′24″	19720923～ 19721020 1973		神社改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特記事項
東 雲 神 社	集落	縄文時代		縄文土器	採　集　品
	集落	弥生時代	土　坑	弥生土器	絵 画 土 器
	墳墓	古墳時代	古　墳	鉄剣他	

松山市文化財調査報告書　第79集

東雲神社遺跡

平成１３年２月２８日　発行

編・集
発・行　松山市教育委員会

〒790－0003　松山市三番町６丁目６－１
ＴＥＬ(089)９４８－６６０５

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ(089)９２３－６３６３

印刷　明星印刷工業株式会社

〒790－0056　松山市土居田町５００番地
ＴＥＬ(089)９７１－７１１１